FEST TOKYO

13TH

ANNUAL REPORT

2022-2023

FEST

CONTENTS

02
代表挨拶

03～08
団体概要

10～23
新支援地選定

24～41
BLOCKIII

42～55
ヴィラ

56～58
その他の活動

60～80
メンバーコラム

81～82
14期代表来季の展望

83
最後に

代表挨拶

この度は、学生国際協力NGO FEST TOKYO 13期活動の軌跡である、
渡航報告書をお手に取っていただき、誠にありがとうございます。

団体創立13年目となる今年は、FESTにとって激動の一年でした。
様々な困難を乗り越え、約4年間にわたるパンデミックによる渡航の中止から
渡航再開を果たしました。
思うように活動できず苦しい歳月を乗り越え、13年の時がたった今でも私たち
の活動が受け継がれていることは、非常にこの団体が多くの共感を呼ぶ点に
ほかならないと思います。

さて、この資料は、普段FESTを応援してくださっている
国際協力への関心が高い皆様へ、あるいはこれからFESTの仲間になる同志へ
向けた、今期たったの2人でスタートしたFESTがどのようにして現地での活動
再開へ向け歩んできたかの記録であります。
最後までご覧いただければ幸いです。

13期代表 池亀 廉

団体概要

正式名称 学生国際協力 NGO FEST TOKYO
創設日 2010 年 7 月 28 日
構成員 大学生 12 人（2023 年 10 月時点）
関係団体 学生国際協力 NGO FEST HIROSHIMA (2012 年設立)

1. 組織体制

事業局
海外事業部.....支援地への直接的な支援活動を行う。
国内フォトワーク事業部.....国内での啓発・発信活動を行う。 (人員不足のため一時活動休止中)
事務局
広報部.....主に SNS を媒体とした PR 戦略を行う。
渉外・経理部.....団体の資金調達と資金運用を行う。

2. 団体理念

MISSION 最良の国際協力を探究、実行、啓発する

VISION 世界から向こう見ずな支援をなくす

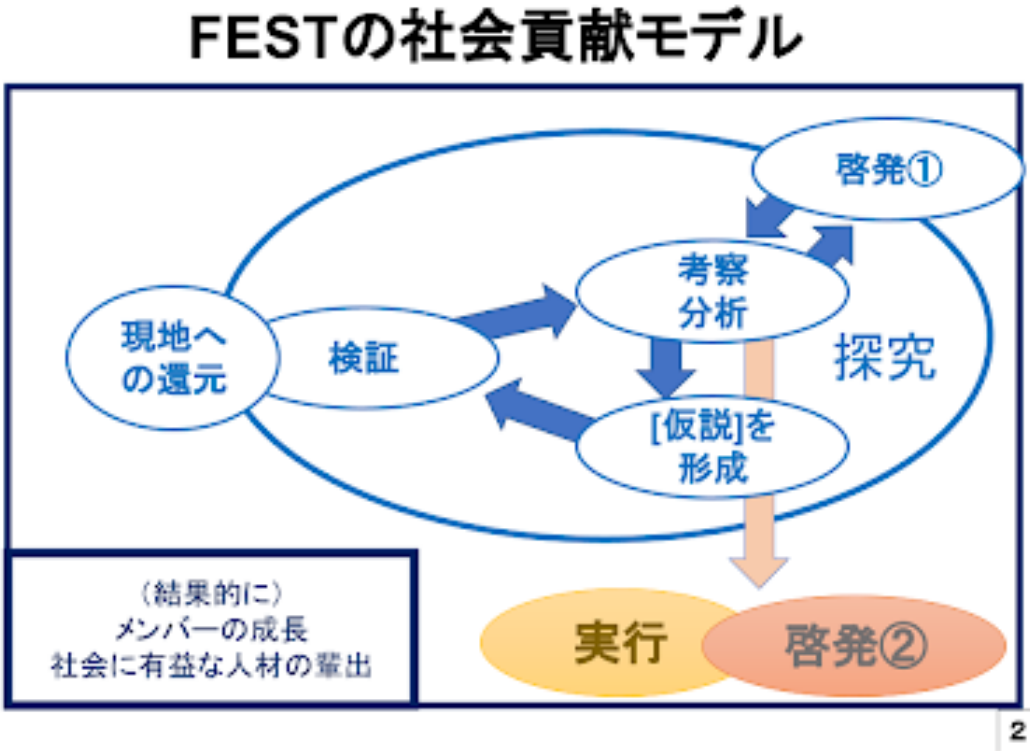
VALUE

QUEST　懐疑的な探究・本質的な活動
FLEXIBLY　柔軟な思考・最適な行動
EVENLY　多様性の尊重・相補的な関係
YOUTHFULLY　自発的な挑戦・将来に亘る還元

「現地のために、自立支援を行う団体」である FEST はそもそも「他の NGO の行う、現地に求められている支援ではない、自分たちのしたい支援を行う姿勢」に問題意識を感じ、創設されたという経緯を持っている。そのような「向こう見ずな支援」をなくすために、FESTは現地に合わせた支援を行うNGOではなく、より良い国際協力を探究していくNGOである。

３．社会貢献モデル

団体理念中の「最良の国際協力を探究、実行、啓発する」にある、学生にできる最良の国際協力を探究するとは、現地で行った活動の経験だけでなく、国内でのミーティングや文献を読むこと、外部の方と実際に会って話すなど、様々な形が期待される。 実行するとはそういった活動の中で得た知識や経験、また各支援地の仮説から「最良の国際協力」について考察を深め、外部の方からのフィードバックを得たのちに完成した支援のモデルを実行する、ということである。啓発においては、上記のように考えられた支援モデルを外部に啓発するのみならず、国内フォトワーク事業部が社会問題や国際協力について関心の無い層までをターゲットにした啓発活動を行っている。以上の探究、実行、啓発のサイクルが「社会貢献モデル」である。



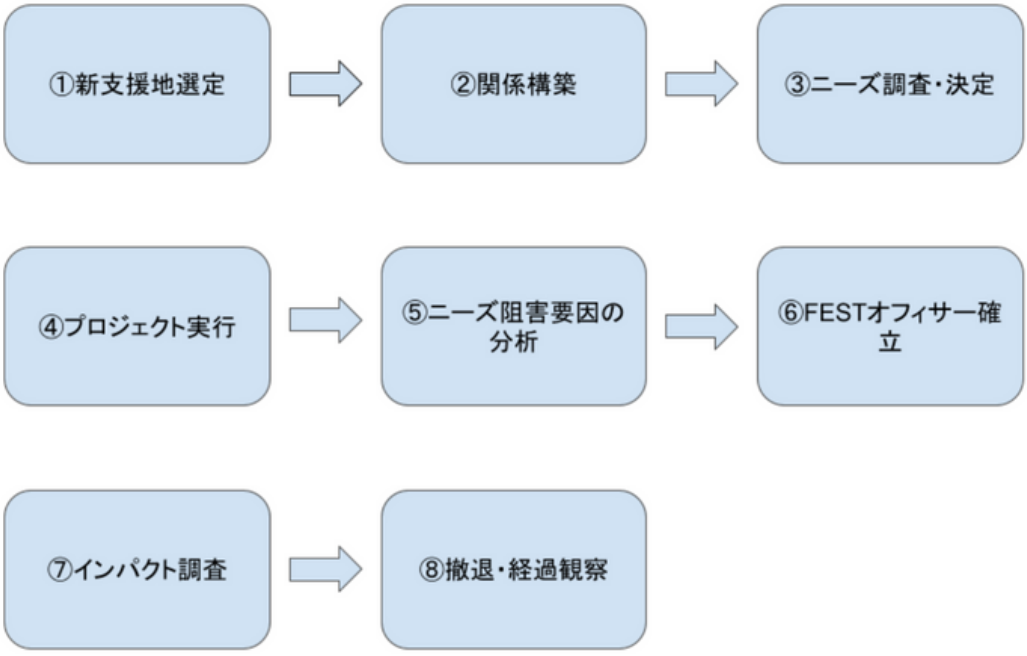
2 FESTの理念

4. 仮説思考

私たちFESTの支援には「仮説思考」が欠かせない。1年間で2回という限られた渡航の中で得る現地の情報を基に、スキルや知識が不十分である学生が、住民の解決したい問題（ニーズ）を把握し、またそのニーズが達成されない要因（阻害要因）に対して正確にアプローチする。このためには仮説思考を用いて、阻害要因の特定をし、さらにその支援方法も模索しつつ、支援を進める。地域の現状や問題についての情報収集だけで何年もの時間がかかってしまうが、仮説思考を用いることによって、地域の問題に対する解決方法の軸を決めることができ、より早く問題解決にあたることができる。 上記の社会貢献モデルの仮説を使用する対象として、以下の２つがある。1つ目は、「住民の阻害要因」を特定することである。そして2つ目は MISSION にもあるように、阻害要因に対する最良の国際協力の「方法」を特定することである。このようにして、以上の2つの仮説を立て、最良の国際協力を探究、実行、啓発していく。もちろん、国際協力に一つの正解があるとは考えていない。地域や環境によってその手法は異なる。その中で学生にできる国際協力、または支援の中でも共通してこれが課題解決に向けてはより良いものがあるのではないかというスタンスで模索しているのである。

5. 主な支援の流れ

上記の理念を反映させた支援の流れとして、FEST は基本的に以下の8つのステップで行う。
13期では、新支援地選定班が①～③の段階に取り組み、ヴィラ班が2019年からの支援地「VILLA SACEDA COMPOUND (通称ヴィラ)」を⑧撤退を行った。



①支援地選定

FESTの支援の流れは、支援地を選定することから始まる。現地の行政機関であるバランガイ(BARANGAY)を訪問し、管轄地域を訪問して候補地調査を行うこと、プロジェクト(以降PJ)を実施することの許可を得る。FESTが提示する条件に合う支援地を探すためには、地域の問題・ニーズを把握している行政機関が適しているからである。また、候補地調査における私たちの安全を担保するために、信頼のおける現地の人と行動を共にすることも重要である。FESTの条件に合う地域をバランガイから紹介してもらい、バランガイのスタッフと共に候補地調査を行う。調査を行った地域の中から最も条件に合った地域を選ぶ。

②関係構築

住民との関わりは信頼関係を築くところから始まる。外部の人間は、住民達に警戒されてしまい、ニーズを聞き出したり、問題の根本を引き出せない。さらに私たちの支援には住民の協力が不可欠であり、信頼関係なしでは私たちの自立支援は成り立たない。そのため、ここへ何をしに来たのか、どんな支援をしようとしているのか、目的をしっかり伝える。住民とのコミュニケーションを重ねることによって、表面的ではない、本質的なニーズや問題の 構造を把握できる。

③ニーズ調査・決定

住民が抱えるニーズは、様々な問題から発生している。私たちは基本的に地域の抱える問題にアプローチしているので規模は地域レベルのニーズになる。ニーズ調査では、口頭や紙媒体で調査をする。 それぞれに調査の方法として意味があり、口頭では、質問を繰り返すなどしてニーズや問題について深く聞き出せる。紙媒体では、住民が時間をかけて地域の問題を考えることが出来る。こうして地域の問題に改めて向き合う機会を作ることで、ニーズの根本的解決の質をあげる。そして出たニーズを基に、どのニーズにアプローチするかを住民とともに集会の形で決定し、これから行うPJを決定する。

④FEST オフィサー確立

決定したニーズに取り組んでもらうため、 FESTオフィサーの確立を行う。この支援を通して、住民主体で問題解決を行えるようになっていくことが私たちの目標である。つまり、問題解決にあたる主役は、私たちではなく現地に住んでいる住民である。FESTオフィサーを確立するために、住民集会などで住民に決めてもらう。 オフィサーには代表、副代表、監査、経理、秘書の主な 5 つの役職がある。地域には既存の組織がある場合が多く、彼らがFESTオフィサーとなる地域もある。FESTオフィサーは集会の進行などのプロジェクトの進行だけではなく、FESTとの連絡係も務める。こうしてFESTオフィサーと連携しながら、PJの成功をサポートする。

⑤ニーズや阻害要因の分析

FESTオフィサーを立ち上げた後、ニーズや阻害要因を分析する。分析をFEST内部で行うのとは別に、PJ内容を決める前に、この作業の重要性を住民に伝え、住民内でも分析を行ってもらう。住民が以降、自分達だけで持続的に問題解決をするためには、この問題分析は重要である。阻害要因を根本まで洗い出せなければ、解決策も表面的になってしまうからである。

⑥プロジェクト(PJ)実行

FESTは、段階的な支援の流れを行う。初めからPJを全て住民に任せるのではなく、最初は FESTも住民と一緒にPJを運営する。住民のモチベーションを上げつつ、住民が主体的に自分たちの問題解決にあたれるような環境を整備する。前述したような 阻害要因の分析のサポートや、目標の明確化、住民集会の開催の促進をFESTオフィサーや地域住民との話し合いを重ねながら行う。次のPJでは FESTがサポートしていた部分を任せ、住民主体を段階的に達成していく。阻害要因の解決やニーズの達成には、1 つのPJだけでは十分でない場合もあり、その際は複数のPJを実施する。

⑦インパクト調査

PJを行うことによって、どんな問題が解決されたのか、 また住民はこの支援によって、阻害要因を取り除き、自分たちだけで問題解決を行うことができるようになったのか。これを評価し、次のPJに反省点や良かった点を生かす。

⑧撤退・経過観察

その後、私たちは撤退する。撤退した後も経過観察をして地域と関わり、PJの影響や、地域の現状はどのようになっているのか確認する。FESTは「支援団体がいなくなっても持続的に住民だけで問題解決に取り組める」そんな環境を目指している。

13期活動概要

コロナ禍による海外への渡航制限により、2019年夏渡航での新支援地選定を最後に、FESTはフィリピン・セブ島でのワークキャンプ（以下WC）が行えない状況が約3年半続いていた。ようやく渡航制限が緩和された2023年春、団体の再発進と存続をかけた13期は、これ以上FESTが介入することによる効果を発揮できないと判断したヴィラから撤退し、新たな支援地の選定を行う方針を打ち立てた。

本稿では13期の活動内容の整理にあたり、以下の2つの班、3つのセクションに分け報告する。

【新支援地選定班】
1.海外事業部が新たに支援活動を行う地域の選定（春渡航）
2.選定後の新支援地での活動（夏渡航）

【ヴィラ班】
3.ヴィラからの撤退（夏渡航）

新支援地選定班
ー2023年春渡航ー

1. 概要
2. 新支援地選定の流れ
3. 新支援地選定条件
4. 訪問した地域リスト
5. BLOCKⅢの決定に至るまで
6. 新支援地選定成果

1. 概要

a. 新支援地選定を行うことになった背景

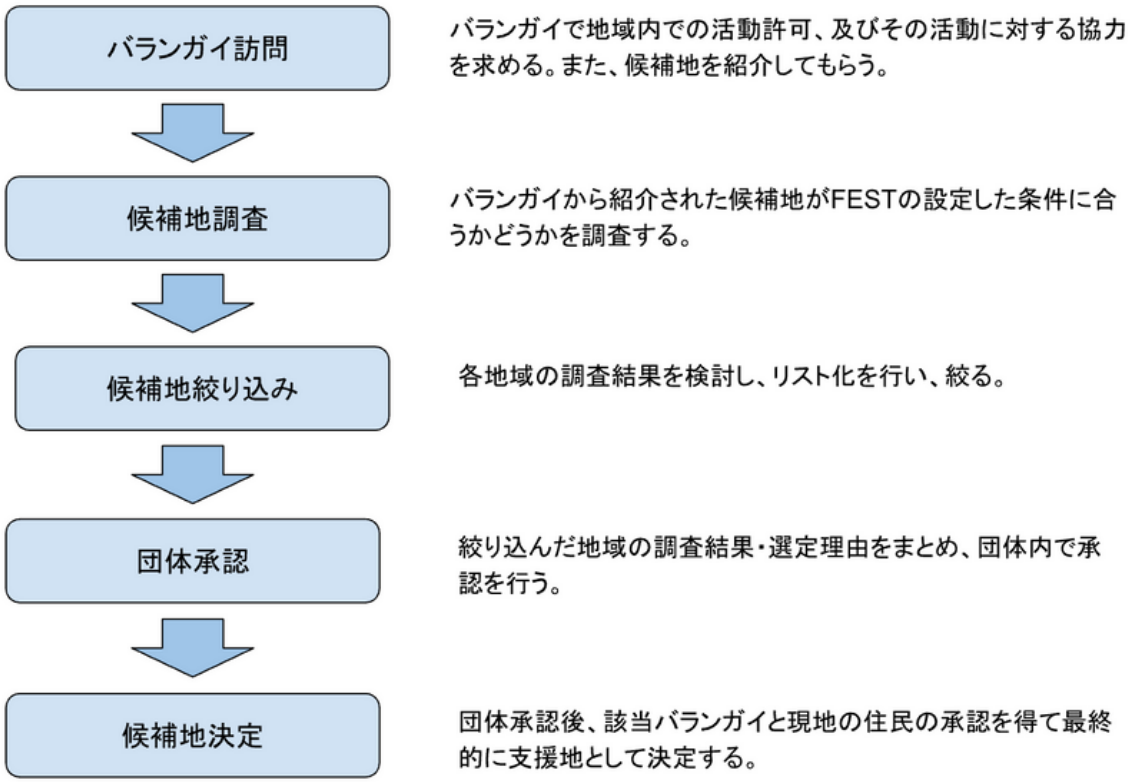
コロナ禍による海外への渡航制限により、2019年夏渡航での新支援地選定を最後に、FESTはフィリピン・セブ島でのワークキャンプ(以下WC)が行えない状況が約4年続いていた。ようやく2023年春に渡航再開できる見通しが立ち、新規メンバーを増やしFESTリスタートを図るために、また、前支援地のヴィラの撤退が決定し（詳細は後述）、海外事業部が今後活動を行っていくうえで新たな支援地を選定する必要性から、新支援地選定を行うこととなった。

学生における国際協力の限界はどこか。今回の新支援地選定にあたり私たち13期はこれからの支援地を選定するうえで、挑戦に出た。私たち学生が支援できる最大限を目指し、決して相対的に恵まれているとは言えないセブ市の中でも特に支援を必要としている地域を選んでいくうえで、積極的な選定を行った。

b.　2023年春渡航　目的・目標

目的：新支援地を帰国後に決定できるように、候補地をまわって判断材料となる情報を集める
最高目標：帰国後、最終候補地を絞り、団体承認を経て新支援地を決定する。
最低目標：一通り新支援地候補地を訪問し調査して、調査した候補地のリストを作成する。

2. 新支援地選定の流れ



3. 新支援地選定条件

現地での候補地調査以前に以下の区分をもとに、新支援地選定条件を設定した。

絶対条件
候補地が必ず満たしていなければならない条件。これを満たした候補地の中から支援地を選ぶ。

選定条件
支援地選定で候補地を比較する際に参考にする条件

内部条件
候補地内の条件

外部条件
候補地内を除く周辺の条件

設定した条件

内部条件（地域内の条件）

絶対条件（確実に満たしておくべき条件）

①直近のデモリッションのリスクが少ない

デモリッションに関して、以下の場合には断念する。
- 現時点で通知が来ている
- 既にそこに何かを建てる予定がある
- オーナーと居住権について揉めている

【デモリッション】
主に新しい建物を立てるための意図的な建物の取り壊しや破壊のこと。土地を借りて家を建設し生活している人々に対し、土地の所有者（貸主）がデモリッションを宣告することは住民の強制退去を意味し、次の生活拠点を探して引っ越しをしなければならない。

②洪水による被害が少ない・起こった際に退避可能

・川の真横・湾岸沿いである
・洪水レベルが高い
・出入り口が1つしかない

※渡航期間（3月・8月）に起こる洪水頻度を住民・バランガイに調査。しかし年によって差があるため、頻度に関するおける条件は設けず、回答を得てから審議。 洪水によるメンバーの被害は、「大雨が降ったら即撤退」の徹底により防ぐことができると判断した。PJ 進行への妨げを容易に予測できるほど洪水被害がある場合は問題であるため、住民や家屋への被害の大きさも調査し、支援の可否を判断する。 また、洪水が起こった場合、付随して起こる問題についても住民に調査する必要があった。

③最低限の生活水準が担保されている（食糧支援といった物資支援の必要がない）

最低限の生活水準を一概に定義づけることは難しいが、以下の点を重視して判断する。
・食生活（一日に何食とるか、等）
・インフラ（電気、水道、下水の他、病院、教育機関も含む）

※物資支援が必要になる地域だと、学生として物資支援のみの継続は難しい。また、団体の理念にもある通り、継続的な物資支援は行わない。ただし、物資支援から自立支援につながると考えられた場合は検討することとする。

④日本と現地とでの連絡手段が確保されている

帰国後、住民と直接連絡が取れることは支援をする上で必須である。連絡をとることができる手段がある・英語が話せるという2つを同時に満たす住民最低２人との連絡手段を確保する。ただし、属性（家庭、性別、年齢等）の異なる住民をそれぞれ選別するよう努める必要がある。

⑤英語を話せる住民が多い

半数以上の住民（子供は除く）が英語を話せることが望ましい。普段英語を話せる人が、地域内にいるかどうかを必ず確認する。具体的数値は定めないが、英語を話せる人が少ない場合は要検討する。 また、地域内で英語が話せるか否かでコミュニティーが分かれている場合（無意識的あるいは自然発生的な場合も含む）も要検討することとする。

※ここでの「英語を話せる」とは、FESTメンバーと地域の問題やPJに関する問題について受け答えできる状態とする。

⑥FESTが支援できる規模である

規模が大きすぎるために、現地に最適な支援が出来ないことを防ぐ必要がある。 アナックとカタンといった前支援地の状況を踏まえ、目安は30～100 家庭と設定する。

※「概要」の箇所に記載したように、学生が支援できる最大限の規模という水準と照らし合わせながらの選定を意識する。

⑦FESTの活動に興味を持っている、協力するつもりがある

FESTの最終的な目標が現地のみで継続的な活動を行ってもらうことであるため、住民やバランガイの対応や反応を見て、明らかに FEST や日本人への拒否感、嫌悪感がある場合は要検討となる。何人かの住民と会話をして判断する。コミュニティーが閉鎖的か否かを事前にバランガイスタッフに確認し、視察の際にトラブルが起きないよう努める。

状況によって判断する条件

①現在NGOの介入があるかどうか

あまりにも深い介入や同じ問題へのアプローチになりそうな場合は断念するが、そうでない場合はFESTとしては差し支えないと判断する。しかし実際に支援を検討する際は、必要に応じて他方のNGOや住民と話し合うこととする。

②コミュニティーの分裂があるかどうか

事前のヒアリングによって完全にコミュニティーの分裂を把握することは難しい。また、 コミュニティーの分裂があっても度合いによっては支援できる可能性がある。したがって、まずはその地域の範囲がどこまでかを住民に確認する必要がある。その際、以下のいずれかに当てはまる場合は地域内の分裂がある可能性が高い。しかし、この点において支援地候補から除外するのではなく、あくまで調査項目として扱う。

・認識が違う場合
・仲が悪く協力したくないと住民が言っている場合
・複数の私有地（またはオーナー）により構成されている場合

外部条件(地域外の条件)

絶対条件 (確実に満たしておくべき条件)

①支援地外に避難場所がある

洪水被害がなく警備員がいて、多少の雨でも安全が確保されている施設が支援地から徒歩15分圏内にあることを確認。ただし、避難場所を利用するのはあくまでホテルに帰れない場合である。その場合、タクシーが利用できない・移動が危険といったことが想定できるため、避難場所まで支援地から徒歩15分以内を条件とした。また、万が一近くの場所で犯罪が起きた際に安全が確保されるように警備員がいる場所とも設定した。訪問時に各バランガイで確認。

②支援地周辺の危険性が低い

セブにおける危険エリア（CARBON MARKETやCOLON STREETなど）から半径1KMは危険区域とみなし、その付近は避ける。また、過去の支援地のまたは候補地だった地域との比較も必要である。

※詳細は後述するが、新支援地として認定された「SAWANG CALERO・BLOCKIIIは」この条件を満たしていない。

4. 訪問した地域リスト

今回の新支援地選定では、4つのバランガイ・5つの候補地を訪問した。

バランガイ位置関係

訪問地域

①Calamba Barangay

a）Mangga

家はコンクリートでできていたり、キッチンがあったりと、春渡航で訪問した地域の中で最も生活水準が高いと判断できる地域であり、FESTへの協力的な姿勢や地域の一体感があった。一方で、支援を必要としている地域ではないという印象も受けた。

b）Area2G
道路が整備されておらず、家の外観から見ても、生活水準は高くないと思われた。洪水がよく起こり、小さな雨でも膝下まで水がきてしまうという問題が指摘されていた。また、この地域はFESTが支援できる規模を超えていると判断した。

②Pahina Central Barangay

c）Sitio Riverside
住宅が川の目の前に位置しているため、雨が降った際に家の付近まで水が溢れてきてしまうという洪水の危険性が高いと想定した。また、バランガイからも治安への注意喚起があり、日本人の学生のみで訪問することの安全上の懸念や、住宅が川沿い3メートル以内に位置する違法地帯であることによるデモリッションの可能性などの懸念点から、支援地としては選定できないと判断した。

③Sawang Calero Barangay

d）BlockⅢ（2回訪問）
家の作りは木製で、一つ一つの規模は大きくない。照明設備等がある家は、少なかった。極度に生活レベルが低いとはいえないが、その他の訪問地と比較して、決して高いとは言えない地域であった。

④Basak Pardo Barangay

e）Kantangkungan 1
所々で排水溝から水が溢れてしまっているところが見られたため、洪水の危険性があると判断した。住宅に窓がないこと、道が狭く整備されていないところが多かったということから、生活水準はあまり高くないと思われた。また、多くの地域のグループが混在していて、地域の境界線がよく分からない状態になっていたため、管轄の整備がされていない印象を受けた。他にも、支援地として選定しなかった大きな一つの理由として、英語でのコミュニケーションが難しかったことが挙げられる。

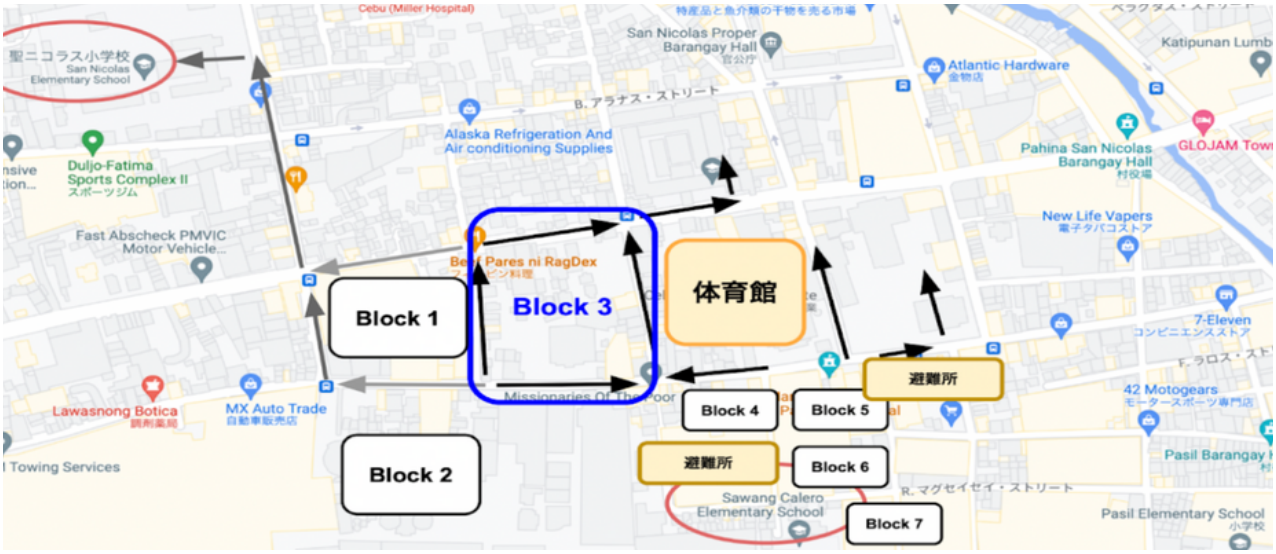
5．BLOCKⅢの決定に至るまで

a．BlockⅢの概要

- **地域名：BlockⅢ　バランガイ名：Sawang Calero（サワンカレロ）**

【サワンカレロ バランガイ】

【BLOCKⅢ周辺の位置関係】



BLOCK III は、バランガイホールの北西に位置するサワンカレロバランガイ管轄内で一番小さい地域である。比較的狭い地域に多数の住民が住むという特徴があり、地域内は狭い通路で結ばれている。住民は、新支援地選定における調査時にも温かくFESTメンバーを受け入れてくれ、住民同士の関係も良好であり、常に明るく・温かい雰囲気がある。

b. Block III の新支援地選定条件に対する調査結果

①直近のデモリッションのリスク	私有地の場所にビルが建つ。ビルの建設が候補地域まで拡大してしまうとデモリッションのリスクが出てくるが、バランガイ・住民からの情報では拡大の可能性はないということのため、直近のデモリッションのリスクはないと判断する。
②洪水による被害が少ない・起こった際に退避可能	洪水は1年を通して頻繁に起こる。激しい雨が降れば洪水になり、膝程まで浸水してしまう。洪水時、雨水は排水溝を通して1時間程で海に流れていく。有事の際は以下の場所に避難が可能。・地域内の避難場所…BlockV(隣接する地域)の右側にある体育館に避難する。・住民の家には避難できない。住民はサワンカレロ小学校と体育館に避難することになっている。・地域外の避難場所…Sawang Calero Elementary School(小学校), San Nicolas proper
③最低限の生活水準が担保されている（物資支援の必要がない）	決して高いとはいえないが、極度に生活レベルが低いわけではないため、最低限の生活水準は担保されている。また、栄養(ビタミン)の補助をバランガイがこの地域に対して行っていると聞いた。詳細については聞けていない。
④日本と現地での連絡手段が確保されている	インタビューに応じてくれたバランガイスタッフ・チャペルオフィサーがFacebookのアカウントを持っていることが確認でき、FESTメンバーとの連絡手段は確保されている。
⑤FEST が支援できる規模である	世帯数は179程度。ひとつの家に2〜3家族が生活している。1家族5人ほど。絶対条件から少しはみ出すが、実際に行った体感として、視察したメンバーが支援できそうな規模であると判断した。

⑥FEST の活動に興味を持っている、協力するつもりがある	オフィサーへのインタビュー時から地域の人たちが集まってきて、興味深そうにしていた。さらに、バランガイのセクレタリーが1/3以上の質問に答えてくれたりと、インタビュー時からとても協力的であった。バランガイスタッフが私たちの条件を理解し、住民にも説明をしながら地域を案内してくれたり、バランガイにいた学生が一緒に回って安全な道を教えてくれたりと地域全体として協力的だった。
⑦緊急時に安全な出入り口があるか安全な集合場所になる場所があるか	出入口は地域全体で3つあり、私有地を含めればBlockIIIで合計4つある。BlockIII内には緊急時の避難所はないものの、バランガイ前の体育館が隣接している。
⑧NGO の介入がある	これまで以下の団体の介入がある。 ①Anya's NGO (日本)　②Bidlisiw Foundation (フィリピン) ③ Kalipi (Women's organization) (フィリピン)　④ CIT-University (学校) (フィリピン) 主にBlockⅦで環境問題やゴミの管理についての支援を行っているとのことだった。
⑨コミュニティーの分裂があるか	住民の関係性は非常に良く、「like a family」と言っていた程、全員が交流がある。
⑩支援地外に避難場所がある	①Block V の右側に避難所がある。 ②バランガイ前にはSport Institute（体育館）がある。ここは他のバランガイの人たちの避難所にもなっていて、このSport Instituteは別のバランガイが所有している。 ③Sawang Calero Elementary School San Nicolas properにも避難所があり、ここも他のバランガイに属している。
⑪支援地周辺の危険性が低い	犯罪はめったにない。この地域のカウンセラーによると頻度は年間3,4件ほどで、主にスリが起きる。お金の流通による危険性が考えられるカルボンマーケット及びコロンストリートが1km以内にある。また、サワンカレロの海側は、ドラッグなどのかなり危険なエリアであると現地の住民にも認識されている。

c. BlockIIIを選んだ理由
3つの候補地を比較し、BlockIIIを選んだ理由として、以下のものが挙げられる

生活水準
・候補地を比較した際、BLOCK IIIの人口規模や生活水準が最もFESTの理念に沿った支援に適していると判断した。
・春渡航で訪問した過去の支援地であるアナックと、生活水準が同じレベルかやや低いように感じ、規模においても同じような大きさだと感じた。

PJの実施
・住民同士の関係が良好であり、若者が多いということから、今後PJを行う際に住民中心の活動を行いやすいと考えられる。
・住民のFESTへの興味・関心から、コミュニケーション・連携の面で円滑に進めることができると考えられる。

治安
犯罪が滅多に起こらず、安全な避難場所が近くにあるということから、治安の面で安心して支援PJが実施可能であると考えられる。

バランガイの協力
調査の段階で、住民とFESTメンバーの間の通訳や地域への案内など、バランガイスタッフやバランガイにボランティアとして参加している学生がとてもFESTに協力的であり、今後のPJでも積極的な協力が考えられる。

総合的な判断
・今後のメンバーにとって今回の支援が初の経験となることを考えると、170を超える世帯数や地域に隣接した危険地域など不安な要素はあるものの、今回の支援地候補の中では最もPJの実施に適していると思われる。
・資金力はあまりないことも予想され、PJのやり方が絞られたり困難なこともあるかもしれない。しかし、だからこそ挑戦する価値やFESTの大仮説を検証するにふさわしい地域でもあると考える。

※サワンカレロバランガイの付近に危険とみなされる地域が周辺に立地しているため、学生の私たちが活動するためのルールを設け特別安全対策を決定した。サワンカレロ特別安全対策を設定することにより、「支援地周辺の危険性が低い」という支援地選定条件は担保される。

6. 新支援地選定を振り返って

この段階で新支援地を決定できたことは、FESTのリスタートとして、想定以上の成果であった。私たちは、SAWANG CALERO・BLOCKⅢは13期として当初掲げた「学生が支援できる最大限という水準」を満たしていると結論づける。訪問した他の地域と相対的にみても生活水準は低く、また過去の支援地と比較しても地域の規模がかなり大きい。今までにない挑戦という点で、より一層やりがいを感じると共に、SAWANG CALRO・BLOCKⅢの支援の終わりに、FESTとして「学生による国際協力の限界はどこか」という問いに対して、新たな提言を行えるのではないかという期待を寄せる。

新支援地選定班　プロジェクトリーダー　鎌田一利

支援地班
ー2023年夏渡航ー

1.概要

2.支援地訪問

3.関係構築PJ

4.ニーズ調査

5.渡航終了の挨拶

6.BLOCKIII活動成果

7.長期的支援計画

ー新支援地での支援開始ー

私たち学生が支援できる最大限の規模という水準と照らし合わせながら、積極的に選定した結果、新支援地となったSAWANG CALERO・BLOCKIII。FESTの理念に沿った支援を責任を持って行っていくうえで、コロナ禍を経たことによって、支援に関するノウハウをうまく受け継ぐことができず、支援の始まりという段階で私たちは困難に直面した。過去の記録を振り返りながら、自分たちで考えを巡らし、何がベストなのか試行錯誤を繰り返した結果を振り返る。

1. 概要

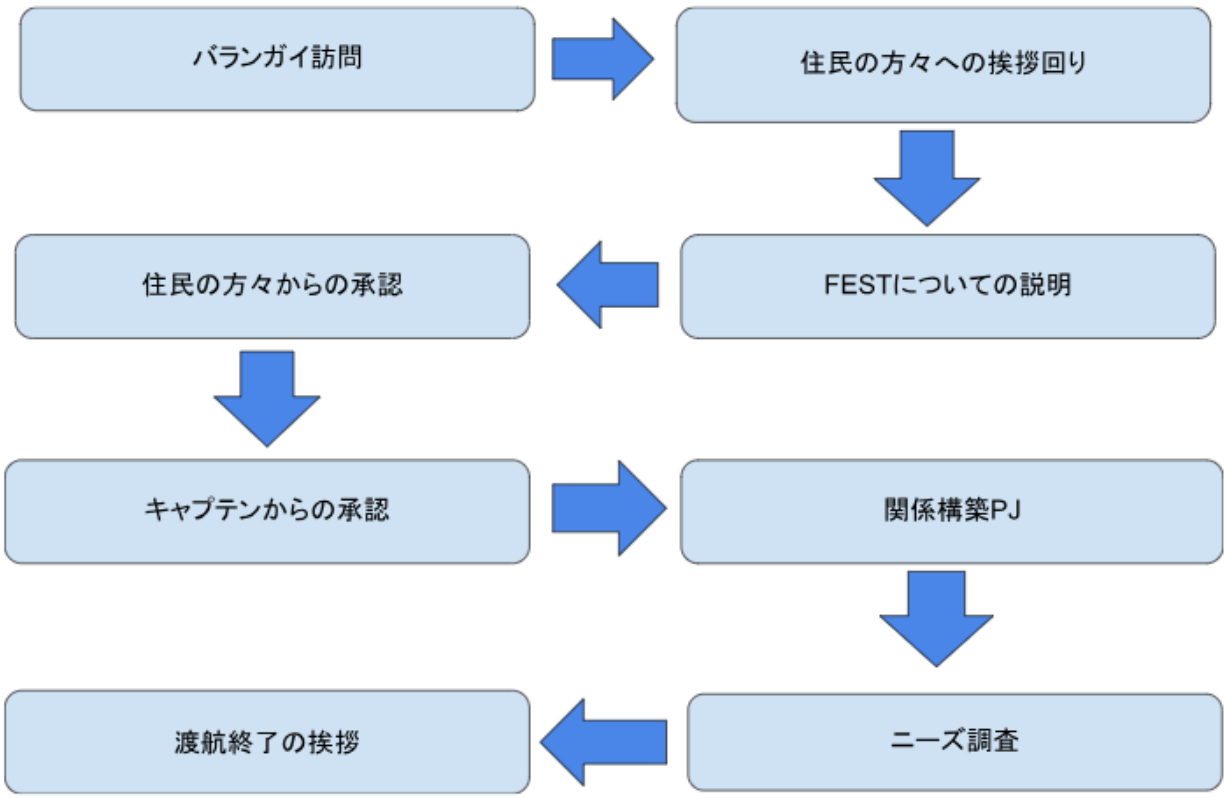
2023年春渡航における新支援地選定、帰国後の団体承認を経て、Sawang Calero・BlockⅢがFESTの新たな支援地となった。

2023年夏渡航は、Sawang Caleroバランガイと BlockⅢの住民による承認を得る段階から始まり、現地のニーズを調査する段階までのまさにこれからFESTが支援を行ううえでの初期段階を行うこととなった。

b. 2023年夏渡航　目的・目標

目的：新たな支援地での支援の初期段階として、今後の支援の基礎・流れを作る。
最高目標：「ニーズ調査」 の段階までを行う。また、関係構築の段階を大切にし、渡航後の住民との連絡手段を確保する。
最低目標：「関係構築PJ」の段階まで行う。（次回の渡航まで期間が空いてしまうことからしっかりとした関係を構築することは最低限行うべきことである）

c. 2023年夏渡航の実際の流れ



2．支援地訪問 （8月11日から8月17日）

a．概要

この夏から新たに支援活動を開始する地域であり、メンバーの大半が初めて訪れるBlockⅢであるだけに緊張感を持ち、足並みを揃えて、初日を迎えた。今回の夏渡航で私たちは新支援地で新たな支援を行うために住民の方とバランガイから承認を得る必要があった。以下の流れで数日にわたりBlockⅢを訪れた。

b.日程ごとの詳細

<u>1．バランガイを訪問</u>　8月11日（金）

目的：バランガイから今後BLOCKⅢで活動を行うことへ承認を得る。

バランガイに入ってすぐにデスクに通してもらい、セクレタリーとBLOCKⅢのオフィサー（地域のリーダー）が同席の上で用意していたレターを渡し、春に行った支援地選定の結果、BLOCKⅢを選定したことを説明した。
その後、BLOCKⅢ地域内に入り、重要人物の紹介を受けた。重要人物の家の場所と大まかな道を確認した。

結果：支援地に入ることを許可してもらったが、正式に支援の許可を下すのはバランガイキャプテンであり、キャプテンが同席できる日程を調整し、後日改めて挨拶と説明をすることになった。

２．住民への挨拶回り　８月12日（土）

目的：FESTの名前を広め、翌日に行う説明会に来てもらう。
また、協力的な住民の顔と名前を覚える。

バランガイにてオフィサーと待ち合わせをし、地域の重要人物を紹介してもらい挨拶をした。重要人物の家の場所と大まかな道を確認した。

結果：2時間の活動で多くの住民の方への挨拶と翌日に行う説明会の宣伝を行った。また、住民の方々が協力的だったお陰で約40名の顔写真を撮影し、名前を知ることが出来た。

３．住民への説明　８月13日（日）・８月16日（水）

目的：FESTの活動内容と方針を知ってもらう。

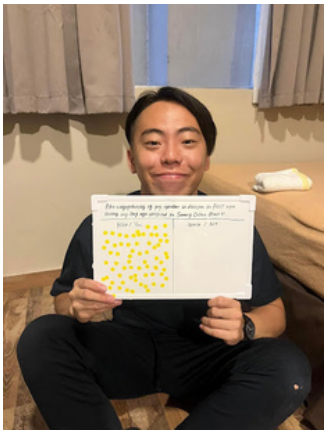
挨拶回りの際に来ることが出来なかった住民も多く集まった。改めてFESTの理念や方針を紹介し、春の候補地調査によってBLOCKⅢが選定されたこと、今後FESTが住民と共にBLOCKⅢで活動を行うことの承認をいただきたい旨を伝えた。説明終了後、住民の方からの質疑応答に答えた。

結果：2日に分け多くの人へ団体の説明と方針を伝え、FESTの活動を理解してもらうことが出来た。

４．住民による承認　８月13日（日）・８月16日（水）

目的：FESTが活動を行うことへの承認を得るとともに、共に活動をし支援を受けるという自覚を持ってもらう。

説明と質疑応答の終了後すぐに投票に移った。日本から持っていったホワイトボードに用意したYESかNOどちらかのスペースにシールを貼ってもらう方法で投票を行った。
なお、参加者の過半数が同意した場合承認を得ることができるという条件を事前に定めていた。



結果：地域住民による承認の投票を行った結果、FESTがBLOCKⅢで活動することに対して、1日目に69名・2日目に37名と両日共に参加者全員からYESをもらった。

５．バランガイキャプテンからの承認を得る　８月17日（木）

目的：BLOCKⅢ内での活動を開始できるようにバランガイから承認を得る

バランガイキャプテンにレターを読んでもらい、プロジェクトの補足説明を行った。キャプテンがあまり英語が得意ではなかったため、セクレタリーが通訳となり、メンバーが説明を担当した。

結果：現在のキャプテンからの承認は得ることができたが、2023年10月に行われる予定の選挙でキャプテンとカウンセラーが変わる可能性があるため、その場合、次の春渡航の際に新たなキャプテンから承認を得る必要がある。

３．関係構築ＰＪ　8月20日(日)

A．概要

支援地で本格的にニーズ調査を始め、ＰＪを住民主体で開始していくためには、「住民との信頼関係」の構築が必要不可欠である。なぜなら、ＦＥＳＴが行う国際協力は住民の協力なしでは達成しえないからだ。関係構築ＰＪでは、支援地の子どもたちや住民と触れ合うことでの国際交流や、親睦を深めることを目的としている。関係構築ＰＪの達成度を図るために、以下のように目標を定めた。

最高目標
オフィサーなどの地域の重要人物に加え、子どもたちや住民とのふれあいを通して、今後も互いに会いたくなるような関係を築く。

最低目標
少なくとも関係構築の場を設け、周知させることでＦＥＳＴの存在を住民に認知してもらう。

B．実施内容

①お菓子釣り

お菓子釣りのルール
・制限時間40秒で好きなお菓子を釣ることができる。 ・釣れたお菓子は全て受け取ることができる。

②輪投げ

輪投げのルール
・1人2回輪を投げて、遠くに入った方の景品を渡す。 ・フィリピンのお菓子ゾーン、30円のお菓子ゾーン、50円のお菓子ゾーン、70円とピンを3つずつ計12本配置する。70円ゾーンに入れられた人には先着25人にカルピスを渡し、なくなったら70円のお菓子を渡していく。

③ゴミ拾い企画

住民に「ゴミを捨てること」が衛生面・景観面等で問題となることを認識してもらうために、関係構築PJ後のゴミ拾いを住民に呼びかけ、一緒に行うことを計画した。また、PJ中にも定期的にゴミ袋をもったメンバーが周回し、こまめにゴミを捨てるということを意識してもらった。

C．成果

住民の反応は良く、関係構築PJの企画に積極的に参加してもらった。良かった点としては、事前の打合せ通りゴミ拾いの声かけを定期的に行うことができた点である。反省点としては、準備段階で聞いていたパーティーに使えるスペースの認識に差異が出ていた点である。しかし、FESTメンバーとBLOCKⅢリーダーで話し合いをし、早急に予定通りの場所に移動し定刻に開始することが出来た。

また、関係構築PJがFESTの認知度を広げる上で、どれだけ効果的だったかを図るために、後日第1回目のニーズ調査で効果測定を行った。結果は以下のようになった。

「FESTを知っていますか？」回答人数：43人

YES：37人（86%）
10代：7　20代：6　30代：8　40代：5　50代：5　60代：2　70代：3

NO：6人（14%）
10代：2　20代：1　30代：2　40代：1　50代：0　60代：0　70代：0

考察

効果測定の結果、全体の86％がFESTのことを認知しており、関係構築PJを始め挨拶回り・団体説明の効果がある程度表れていることが裏付けられた。そのうえで、該当の質問項目にNOと回答した人・FESTのことを知らないと言った人に対しては、住民用のレターを再配布するなどの出来る限りのことは行った。今後、FESTのことを知らない人（全体の14%）に対する認知のフォローアップをどう行っていくかを考えていく必要がある。また、年齢別に見ていくと、比較的若い世代にFESTの認知が行き届いていない傾向があると分かった。

D．関係構築PJの振り返り

良かった点◎
・住民がとても楽しそうだったことに加え、私たち自身も楽しむことができ、良い関係が構築できた。 ・十分にFESTの存在を周知することができた。 ・住民に、輪投げとお菓子釣りが好評で10月にあるイベントで使うと言ってもらった。 ・事前の打合せ通り、お菓子の残量把握やゴミ拾いの声かけを定期的にできた。 ・住民も一緒にゴミ拾いをしてくれた。

悪かった点△
・景品用のお菓子の渡す量に認識の違いがあり、想定よりも景品が早く尽きてしまった。 ・お菓子釣りの方で列が作られていなく、順番が守られていなかった。 ・事前に言われていたテントの設置について、住民側との連携が十分でなく、当日用意できていなかった。また、用意されている前提で動いてしまっていた。 ・BlockⅢ外の子どもたちもいたが、対応できていなかった。

4. ニーズ調査

概要

住民が抱えている問題は住民にしか分からない。私たちの想像や価値観だけで支援活動を行うことは、私たちからは見えない根本的な問題を見逃してしまうことに繋がる。今後もその場で生活をしてゆくのは住民であるからこそ、住民の思いや生活は尊重されるべきであり、そのためには住民の声によく耳を傾ける必要がある。そして、住民が主体となって問題解決を進めてゆくためには現地の問題解決能力にしっかりと目を向ける必要もある。

住民からのニーズを聞き、住民と共に解決策を考えるために、ニーズ調査では、現地住民に「何を解決したいのか」、「なぜそれを解決したいのか」、「どうしたら解決ができるのか」など、より問題を具体的にイメージしてもらうためのアンケート調査を行った。

【第1回ニーズ調査】8月22日(火)

a. 質問内容

住民の名前・年齢・職業を把握した後、住民が抱えている問題とその理由を聞き出した。ここでは、幅広い年齢・職業の人にアンケートをとることを意識し、地域内のあらゆる世代が見た様々な視点からの問題を探ることを目的とした。さらに、今まで解決を試みたことがあるのか、どのようにしたら解決できるのか、FESTに何ができるのか等、「認識している問題を解決する力があるのか」と「FESTに求めていること」を調査するための質問項目も用意した。

回答は英語を基本とするが、ビサヤ語でも可とした。実際に伺った質問内容は以下である。

英語	ビサヤ語
name	Pangalan
gender	Kasarian
age	Edad
place of residence	Lugar sa pagpuyo
occupation	Trabaho
Do you know FEST?	Kaila ka FEST?
Are there any issues that you and residents face during your daily lives in Sawang Calero BlockIII?	Aduna bay mga isyu nga imong giatubang ug mga residente sa imong adlaw-adlaw nga kinabuhi sa Sawang Calero Block III?
What are the major issues in this community, BlockIII? Among those issues, What do you want to solve or improve in this community?	Unsa ang mga dagkong isyu niini nga komunidad, BlockIII? Lakip sa mga isyu, Unsa ang gusto nimong sulbaron o pauswagon sa kini nga komunidad?
Why is this fact a major problem in the community?	Ngano nga kini nga kamatuoran usa ka dakong problema sa komunidad?
Have you ever felt it difficult to solve that problem? May we ask Why?	Nabatyagan mo na bala nga mabudlay solbaron ina nga problema? Makapangutana ta ngano?

How do you think the problem can be solved?	Sa imong hunahuna sa unsang paagi masulbad ang problema?
When a problem occurred, which officer dealt with it? or who do you think will deal with the problem?	Kung adunay nahitabo nga problema, kinsa nga opisyal ang nag-atubang niini? o kinsa sa imong hunahuna ang mosulbad sa problema?
Have you ever felt it difficult to solve that problem? May we ask Why?	Unsa nga mga proyekto sa imong hunahuna ang kinahanglan buhaton sa FEST aron masulbad kana nga problema?

b．結果

第1回ニーズ調査では、主要なニーズとして「洪水」、「雇用」、「栄養失調」、「若者の協調性のなさ」、「その他」の5つが挙げられた。

また、広い世代からの回答を得ることができ、様々な視点からの問題を認識することができた。しかし、洪水の問題であればその問題がどの頻度で起こり、何が引き起こされるのか、栄養失調の問題であれば普段何を食べているのか等、問題の詳細を詳しく聞き取ることができず、PJへ移るには情報が少ないと判断した。

【第2回ニーズ調査】8月28日(月)

a. 第1回ニーズ調査から第2回ニーズ調査までの経緯

第1回ニーズ調査では、アンケート形式により地域内の住民の年齢・職業・名前を大まかに収集し、各住民の考えるニーズについて広範囲から回答を得ることができた。しかし、その問題の詳細と現状、つまり「阻害要因」に迫るための情報が不足していた。FESTでは、住民自身での問題解決を妨げる根本要因について仮説を立て、そこからプロジェクトによる検証を通じて地域の住民に還元することを重要視している。なぜなら、問題解決を阻害する要因を取り除かなければ、根本的な問題解決には繋がらず、「向こうみずな支援」となってしまう可能性が高まるからである。

以上の理由より、第1回ニーズ調査で明らかになった地域の主要なニーズをさらに深掘りするために、第2回ニーズ調査では口頭インタビュー形式で住民から聞き取り調査を実施した。

b. 質問内容

問題の詳細や問題解決の阻害要因となり得る情報を引き出すために、第1回ニーズ調査の結果を精査し、それを元に質問内容を作成した。最初は第1回と共通して地域の主要な問題・ニーズについて尋ねるが、その回答に応じて該当する項目をさらに掘り下げる形を取った。

【住民に提示した質問用紙】

【洪水】	
1. How often does the flood happen?	Unsa ka sagad mahitabo ang baha?
2. After the flood, what happens to your house and Sawang Calero block III?	Unsa ang hitsura sa imong balay o lugar pagkahuman sa pagbaha?
3. Are there other problems caused by flooding?	Duna bay laing problema nga gipahinabo sa baha?
4. Did someone or some group try to solve this problem before?	Aduna bay usa o piplia ka grupo nga misulay sa pagsulbad niini nga problema kaniadto?
【排水溝】	
1. Is there someone who is in charge of the drainage?	Aduna bay usa nga nagdumala sa paglimpyo sa kanal?
2. Who made(built) the drainage?	Kinsa naghimo sa kanal?
3. Do you need a permit to construct the drainage?	Nagkinahangla ba og permit sa paghimo sa drainage?
4. Who will construct the drainage?	Kinsa ang mobuhat sa drainage work?
5. How much money do you need for the construction? If you need money… Is there anything like a neighborhood membership fee now?	Pila ang gasto niini? Kung nanginahanglan ka ug kwarta... naa bay sama sa bayad sa membership sa kasilinganan karon?
6. Is this drainage old?	Karaan na ba kini nga drainage?
7. How well does this drain work? (how many and dept, long)	Unsa kadaghan ang functionality ? (gitas-on, giladmon, numero)
8. Where is the drainage?	Asa ang drainage?
【ゴミ】	
1. When will the garbage truck come?	Kanus-a moabot ang garbage truck?
2. Are there any rules for collecting garbage?	Aduna ka bay mga lagda sa basura sa inyong lugar?
3. How does the Barangay collect garbage?	Giunsa man pagkolekta sa barangay ang basura?
4. Did anyone try to solve it?	Aduna bay usa o pipla ka grupo nga misulay sa pagsulbad niini nga problema kaniadto?
5. What do you mean for garbage collectors to be lazy?	Unsay buot ipasabot sa mga basurero nga tapolan?

【財政と雇用】 1. Was there any financial support from official organizations?	Aduna bay pondo gikan sa mga opisyal nga organisasyon?
2. What percentage of young people are unemployed？	Pila ka porsyento sa mga batan-on ang walay trabaho?
3. What do unemployed young people have in common?	Unsay komon nga mga batan-on nga walay trabaho?
4. What percentage of people go to high school?	Pila ka porsyento sa mga tawo ang moadto sa high school?
5. Do you have a small business now or do you do anything else?	Aduna ka bay gamay nga negosyo karon o aduna ka bay laing gibuhat?
【公衆衛生・健康】 1. How is flood and sickness related?	Unsa ang relasyon tali sa baha ug sakit?
2. What kind of disease is that?	Unsa nga sakit?
3. Who is being sick?	Kinsa may sakit?

c．結果

住民への聞き取り調査を通じて、より深い部分となる地域が抱える問題の詳細や現状について情報を収集することができた。また、第1回ニーズ調査で意見として出てこなかった新たな地域のニーズの存在についても把握することができた。

BlockⅢの主要なニーズとして考えられるものは、「①洪水・排水溝」「②財政的問題」「③ゴミ」「④病気・健康問題」そして新たなニーズとして取り上げられた「⑤教育」の5つである。今後は、結果を元に阻害要因の分析、仮説の検証に向けた具体的なプロジェクト案について考えていく。

【第2回ニーズ調査の結果】(※一部)

① 排水溝

・住民税はないが、排水溝を掃除してくれる住民に各家庭が1回の清掃につき10ペソを支払っている。

・清掃者は地域内で2人おり、エレナさんのご近所の方である。排水溝の水をホースで吸うことで掃除をしている。最後に掃除がされたのは先月であり、定期的なものではない。

・排水溝が浅いため、浸水を防ぐために、さらに大きい排水溝が必要。

② 財政的問題

・しっかりとした教育を受けることができたら仕事を得ることができると考えている。

・これまでに公的機関から資金支援を受けたことはない。

・住民の主な職業は清掃員、セールスレディー、ウェイター、工事作業員など。高校進学しなかった人もこういった職業につくことが多い。

・シングルマザーが多い。

③ゴミ

・ごみが排水溝に入るため水が汚れている。

・ごみによって洪水のときに汚れた水が溢れ、家の中に流れてくる。

・ゴミの回収は朝7時、5時。2日に1回にバランガイのトラックが収集しにくる。

・かつては、燃えるゴミと燃えないごみで各家庭分別していた。

④病気・健康問題

・洪水の時の汚水によって子どもが病気になる。病気にかかるのはよくあることである。

・Leptose virusesという病気にかかる。

・洪水により、ネズミの糞や蚊が発生しやすくなり、病気になる。

・近くの病院は公共のCEBU CITY HOSPITAL。中には病院へ行けない人もいる。

⑤教育（※第2回ニーズ調査で明らかになったニーズ）

・小学校で用いる学用品を財政的な問題で購入できず、足りない。
（文房具、クレヨン、鞄、制服など）

→子どもが学校に行けない。

・BlockIII内では中学校進学が50%、高校進学が30%くらいである。

d．ニーズ調査の振り返り

良かった点◎
(第1回ニーズ調査) ・広範囲の世代からの回答を得ることができた。ニーズが偏ることなく、広い視点からの意見が得られた。 (第2回ニーズ調査) ・事前に用意していた質問内容以外にも、住民から得られた回答を元にそれについてさらに深掘りをすることで、臨機応変に対応ができた。

悪かった点△
(第1回ニーズ調査) ・問題の詳細まで聞き取ることができなかった。 (第2回ニーズ調査) ・質問によっては質問する対象者を絞ったものの、不在であるとか探せない等の理由によりインタビューをすることが難しかった。 ・英語が話せる住民に通訳をしてもらう際に、実際の回答者である住民ではなく通訳の方に聞く姿勢になってしまうことが多々あった。

5．渡航終了の挨拶 8月30日(水)

住民たちが自分たちで問題を解決できる力をもつことができなければ、FESTがむこうみずな支援を行っていることに変わりはない。それを避けるには、FESTがいない間にも、BLOCKⅢの住民の問題に対する意識の向上・将来的にFESTの支援がなくても自分たちで問題を解決していける力の育成を住民主体で行ってほしいというFESTの思いを理解してもらう必要がある。そのことを伝えるために、現地での活動最終日にレターを持参し、バランガイとBLOCKⅢを訪問した。

6．BLOCKⅢでの活動を振り返って

2023年夏渡航は現地での支援の承認を得ることができ、支援の初期段階として、住民との交流による関係構築に加え、今後のPJ立ち上げの基盤となるニーズ調査を行うことができたことも大きな成果と言える。住民たちとは今後更なる交流を行い、信頼関係を築いていく予定であるが、その際の注意点として、前述の通り、住民一人一人がNOが言えるような雰囲気を作るということを意識したい。関係が深まり、彼らもFESTを歓迎してくれる分、「君たちが言うことには賛成に決まっているじゃないか」といった雰囲気が作られる場面が今後想定できる（実際今夏渡航でも、支援の承認の際などの場面でそのような傾向が垣間見えた）。そうなってしまっては、FESTが掲げる「住民主体の支援」が本当にできているのかということが問われてくる事態となる。あくまでも住民たちが自分たちの意思で、手で問題を解決できるようにFESTは「向こう見ずな支援をなくす」という団体の理念を念頭に置き、今後も活動を行っていく必要がある。

新支援地選定班　プロジェクトリーダー　鎌田一利

7．長期的支援計画

a．概要

2023年春・夏渡航は新支援地選定から新支援地における支援の初期段階までを行い、ニーズ調査まで完了させた。コロナで途絶えていたFESTの現地での活動をリスタートさせることができたと結論付ける。そこで、14期新支援地班は、始めに「ニーズ調査の結果の分析」を行う。それに続き、分析結果をもとに「仮説立て・PJの考案」を行い、現地とFESTの連携をより円滑にするために、「現地組織の設立」も次回の渡航までに行っていく予定である。

b．今後の流れ

11月 渡航報告会
11～12月 ニーズ調査の結果の分析
11～12月 仮説立て・PJの考案
1月 現地組織の設立
2月 春渡航準備
3月 春渡航

c．活動内容

ニーズ調査の結果の分析
〈手法〉
FESTが今まで阻害要因を決定し、仮説を立てる際に使用してきた調査内容の因果関係をまとめる手法を用いる。具体的には、「調査内容を5つほどに大きくカテゴライズし（洪水関係・ごみ関係など）、それぞれの真因の比較を行う」こととする。

仮説立て・PJの考案
〈手法〉
分析した真因の比較をもとに、それらの優先順位を決める。FESTとして次回の渡航の際に、支援地の住民にPJを決定してもらえるように仮説とそれに伴うPJを複数用意する必要があるため、決定した優先順位に従い、真因を「阻害要因」とした仮説立てに加え、それに伴うPJの立案を行う。

現地組織の設立
〈目的〉
FESTは1年を通して、2回しか現地での活動を行えず、現地に常に活動拠点があるわけではない。そんな中、春渡航開始時に滞りなく活動を始められるように、また今後PJを支援地主体で円滑に進めていくために、支援地とFESTが綿密な連携を取る必要がある。
〈内容〉
現在作成してある「支援地重要人物」のリストをもとにFESTと連携をとる現地組織の構成＝人事を考案し、支援地に通達を行う。

ヴィラ班

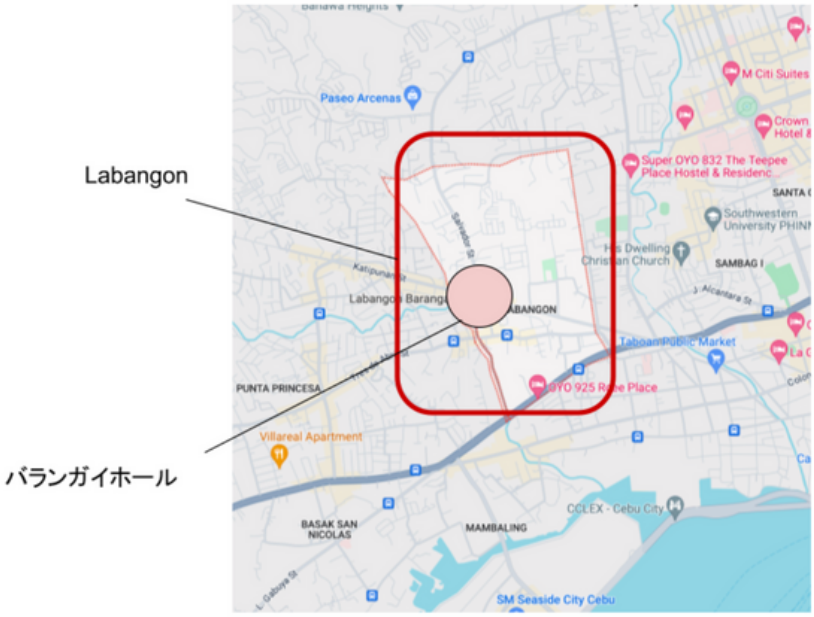
1. 地域の概要
2. ヴィラでのこれまでの活動
3. コロナ禍による渡航中止期間
4. 13期ヴィラ班始動、撤退準備
5. 2023年夏渡航
6. 2023年夏渡航成果
7. 2023年夏渡航(ヴィラ班/ヴィラ撤退)を振り返って
8. 2023年夏渡航ヴィラ班 アルバム

2019年春より、Villa Saceda Compound (Labangon バランガイ)をFEST5つ目の支援地として決定し、ニーズ調査・排水溝プロジェクトの決定まで行った。しかし、2020年より新型コロナウイルスの影響により渡航が中断されたことにより住民との関係が希薄になっていた。そんな中、住民からプロジェクトであった排水溝が完成した旨を伝えられた。パンデミックの終息により渡航が可能になり、ヴィラへの約4年ぶりの訪問を実現させた。

13期ヴィラ班では、12期の最後に話し合いが行われていた撤退を検討する事から始まった(経緯は「4.ヴィラ班始動、撤退準備」(P.48)に記載する)。13期にはヴィラに訪問したことがあるメンバーがいないため、ヴィラの地域概要、関係構築、プロジェクト進行過程、撤退について過去の資料を参考にしたりOBOGからアドバイスをもらいながら住民に直接撤退について伝える方法を検討した。2023年夏渡航にて撤退が完了したため、この章では、OBOGとヴィラとの関わり、コロナ禍、現在までの流れを振り返り、どのように撤退したのかを記載する。

１．地域の概要

支援地名：　**Villa Saceda compound (通称ヴィラ)**
バランガイ：**Labangon Barangay (Cebu City)**



バランガイホールからヴィラまでは車で5分ほど行き、そこから徒歩5分ほどで到着する。

ヴィラは2019年3月春渡航から支援を開始した地域で、世帯数は約25世帯と、最小規模であった。多くの住民が働いていて、平日の日中は地域内に大人があまりいないことが多かった。地域内の住宅は各家に塀やフェンスがあり建物も比較的頑丈な造りで整備されていた。通路は幅が広く通常時は問題無いようだが、道は十分に舗装されておらず地面が剥き出しになっていた。

ヴィラ班での活動

新支援地選定

2018年4月から7月の間に候補地を2つまで絞った。2019年春渡航では、この2つの候補地から1つを新支援地として決定することを目標の1つとして、前回渡航から変化した点がないか、より詳細な情報を得るために住民へ聞き込みを行った。

ニーズ調査開始

ヴィラを支援地として決定した後、2019年3月の春渡航にて実際に支援を開始するための調査と関係構築イベントを行った。

住民へのニーズ調査により、ヴィラでは排水溝整備プロジェクトを実施することに決定した。2019年4月から7月まで、排水溝プロジェクトのプランニングを行い、8月の夏渡航で排水溝プロジェクトのための聞き込みを行った。

排水溝プロジェクトの準備

排水溝の整備のために、地域で毎月集めている町内会費であるMonthly Dues（以降MD）を活用することにしたが、MDがうまく運営されていない事がわかった。

以上のことから、「ヴィラ住民が自分たちで地域の問題を解決出来ていないのは、地域組織のシステムの欠陥に起因している。」という支援地仮説を立てた。

【Monthly Dues】
現地の地域組織が3年前から地域内の全家庭を対象に集めている町内会費、管理組合費のようなもので、地域全体に関わる税金の支払いなどに充てている。

3．コロナ禍による渡航中止期間

オンライン関係構築(11-12期)

2019年夏渡航にて排水溝プロジェクトを行うことに決定した。しかし、新型コロナウイルスの影響により2020年春渡航が中止となり現地でのプロジェクトを進めることができなくなった。新型コロナウイルスはFESTの活動に大きく影響し、渡航中止は10期から12期まで続いた。渡航ができない状況でもヴィラとの関係を維持するために、10期・11期・12期では、Facebook投稿、Messenger、テレビ電話などを使用したオンラインでの関係構築を試みた。しかし、住民の返信率の低さから現地の情報を得ることが難しく、またオンラインでプロジェクトに関する話を進めることのリスクなどもあり、住民との関係構築は困難であった。

撤退経緯 (12期)

2020年の春渡航中止から約2年、住民から渡航をしていた際に付き合いのあったOBへ排水溝が完成したという連絡が届いた。渡航中止期間に排水溝が完成したということから、今後ヴィラを訪ねるとなると再度関係構築を行い新たなプロジェクトを立てて進めるか、撤退するかという選択が必要になった。この状況を踏まえ、2年近く渡航ができておらず、現地住民との関係が希薄な状態でメンバーも少ないことから、当時関わっていたOBOGとも話し合いを重ね、2023年の春渡航で撤退する方針を立てた。13期春渡航では当時3人という危機的状況打破へ向け、新規メンバー獲得を急ぎ、新支援地選定を春渡航で優先させたため、実際の撤退は2023年の夏渡航となった。

ヴィラ排水溝写真

完成前の排水溝

降雨時

雨が上がったあと

雨が降っていない時の排水溝

完成後の排水溝

4．13期ヴィラ班始動、撤退準備

13期ヴィラ班では、2023年夏渡航でのヴィラ撤退に向けて準備を進めた。現役メンバーは全員ヴィラへの渡航経験も、支援地からの撤退経験もなかったため、撤退経験やヴィラへの渡航経験のあるOBOGと相談を重ねた。撤退準備を進める中で、撤退をすることが本当に住民のためになるのか、FESTが今まで行ってきた撤退の手続きをヴィラの場合でも同じように行うべきなのか、どのような言葉を使って撤退を伝えるべきなのかなど撤退手続きについて長い時間をかけて話し合いを行った。

新型コロナウイルスという異例の撤退であるため、FESTが撤退の過程で以前まで行っていた手続きの中でヴィラの場合では適用しない項目がいくつかあった。今までは、撤退の決定に団体内承認が必要であったが、今回は長い間現地の状況を確認できておらず承認するかどうかを決めるための情報もないということから、承認という過程は適応されないと判断した。また、撤退の手続きには団体内承認の他に撤退基準があった。今までは住民にオーナーシップがあるということ、問題があるかぎり持続的に問題解決ができること (FESTが撤退後もアプローチがなされること)を撤退基準としていた。しかし、ヴィラの場合は基準を設定してしまうと基準を満たすことができず撤退できない可能性が生まれてしまうという点やプロジェクトに直接関わることができていなかったという点から、設定しないこととした。

更に、FESTは支援地でプロジェクトを開始する際に仮説を立て、撤退の際に仮説を検証する仮説検証という過程がある。仮説を検証するには現地で住民に調査をする必要がある。しかし、現地で調査をしてしまうことで「なぜ4年間も来ていなかったのに、今突然来て話を聞きに来たのか」というように住民に不信感を与えてしまう可能性や、詳細に調査をすることで新たに住民が抱えている問題やニーズが分かり、「新たなプロジェクトを行ってくれるのではないか」というような今後の支援を期待させてしまう可能性があると考えた。このような複雑な現状から、FESTが今まで撤退の際に行っていた仮説検証をヴィラでも行うべきかどうか検討した。検討の結果、13期では以前のような仮説検証の流れに従わず、13期独自の方法で仮説検証を行うことにした。従来の仮説検証とヴィラで行った仮説検証について以下にまとめる。

〈従来の仮説検証〉

問題を認識する→解決策を立案する→実行する

〈13期の仮説検証〉

・深い調査が住民に与える影響にはどのようなものが考えられるのかの検討
・現地で住民がどのような反応をするのか、現地で考えられる場合分け
・現地の反応を想像し、どのように対応することが適切かを考えるロールプレイ

以上3つの活動を通して、質問内容の検討(どの質問は聞いて、どの質問は聞かない方がいいのか)を行った。

仮説
ヴィラ住民が自分たちで地域の問題を解決できていないのは、地域組織のシステムの欠陥に起因している。

検証方法
口頭インタビュー

質問内容
・排水溝完成の経緯
・資金調達 (MONTHLY DUESの機能、ガバメントとの繋がり)

※管理、品質、かかった金額、維持費については詳細の質問に当たり、住民に更なる期待を持たせてしまう可能性を考え、聞かないこととした。

対象
当時のオフィサー2人

検討の結果、ヴィラでは排水溝完成の経緯、可能であれば資金調達について住民にインタビューをすることで仮説検証をするということで決定した。検証結果は「項目6 夏渡航成果」(P.51)に記載する。

5．2023年夏渡航

ヴィラ訪問は8月25日に行い、現地での主な流れとしては以下の通りである。

目的
バランガイ・オフィサー・住民に挨拶をし、排水溝完成の事実確認をし、撤退の経緯を伝え撤退する。

最低目標
住民のことを第一に考え、バランガイ・オフィサー・住民に撤退すると伝える。
※メンバーが減少している、新支援地選定を優先したいという理由はFEST自体の理由であり、住民には関係ないことであるため、撤退の理由は住民のことを第一に考えて伝える必要があると考えたため。

最高目標
今までプロジェクトで関わってきた住民に感謝を伝え、仮説検証で排水溝建設までの経緯をバランガイやオフィサーに尋ねる。

バランガイ訪問

キャプテンにレターを手渡し、撤退とその経緯を伝え、理解を得られた。バランガイ内の見学やスタッフとの交流も行うことができた。

ヴィラ訪問

現オフィサーに経緯を説明した後、レターを渡し、排水溝完成の経緯についてインタビューを行った。FESTを知っている他の住民に向けたメッセージカードも手渡した。

当時のオフィサーに会い、持参した色紙を渡して感謝を伝えた。その際、昔の訪問の写真を見て懐かしんでいた様子で、家族でとても喜んでいた。

最後に、これまでの感謝と住民との交流を兼ねて、日本から持参したお土産(源氏パイ)を子ども達を中心に手渡した。

※当時、積極的にプロジェクトに協力してくれた当時のオフィサーは不在だったため、会うことができなかったが、後日改めて会うことは選択しなかった。その理由としては、第一に、25日の活動で色紙を渡して感謝を伝えるという目標を達成することができたからである。また、当時のオフィサーに会うことが今渡航の絶対目標ではなく、再度ヴィラに訪問することは住民と深く関わり更なる支援への期待に繋がる可能性があると判断したからである。後日、当時のオフィサーからFacebookで色紙とメッセージカードのお礼のメッセージが届いた。

6．2023年夏渡航成果

今渡航の成果

今渡航の最高目標として掲げていた、「感謝を伝え、撤退すること」は達成できたと考えている。4年ぶりに現地に訪問し、住民に今回の渡航でヴィラを撤退することとなった旨を伝え、また交流を大切にし住民を第一に考えた撤退ができた。

住民からは、現地に来ることができなかったのはコロナ禍だったため仕方のないことだと理解を得られた。さらに事実確認として、排水溝完成の経緯 (下部に詳細を記す) についても聞くことができた。また、当時のオフィサーに直接色紙を渡し感謝の気持ちを伝え、現オフィサーには他の住民に配ってほしいと依頼しメッセージカードを渡した。当時のオフィサーに色紙を渡した際には、9期 (渡航中断以前にヴィラでプロジェクトをしていた代) の頃のことを覚えていた様子であり、色紙の写真を見ながら当時のことを懐かしみ、喜んでいた。さらに、訪問のお礼として持参した源氏パイは子ども達を中心にかなり好評であった。

排水溝の完成経緯

　排水溝の状態として現地を訪れたメンバーの所感だと、整備され、しっかりした造りで今も機能しているように見えた。完成経緯に関しては、現オフィサーと前オフィサーの2人に話を聞くことができた。
　2人によると、排水溝はバランガイ主導で建設されたもので、台風をきっかけに、オフィサーがバランガイに依頼したことで工事が行われた。排水機能については以前よりも問題は緩和されたが、それでも豪雨時は水が溢れることがあるとのことであった。他にも、砂利道の舗装など現在も別の問題が残っているとの発言もあった。しかし、今回は撤退ありきの渡航であり、「まだ問題が残っているから今後も支援してほしい」というような更なる支援を求める発言もなかったため、現在の問題に関してこれ以上の深掘りはしていない。

現地の排水溝の写真

7．2023年夏渡航(ヴィラ班/ヴィラ撤退)を振り返って

　今回の訪問は、13期ヴィラ班が直接関わっていない地域に撤退を報告するという、今だかつて無いイレギュラーな訪問であり、また、実際にヴィラを訪問した2人はいずれもFESTとして初めての渡航であった。よって、ヴィラ班としても、個人としても多くの不安要素を残したままの訪問となった。

　しかし、現地ではバランガイ職員が親切にヴィラまで案内してくださり、住民の方々も暖かく、想像をはるかに超えて歓迎してくださった。さらに、当時ヴィラ班として活動されていた先輩方のご協力の元、製作したメッセージカード、色紙は、記述の通り目的の住民の方々に渡すことができた。一番の目的であった撤退の報告、排水溝完成の経緯の確認もでき、ヴィラの撤退を大成功に収めることができたと実感している。最後に子どもたちに源氏パイを配る際は喜んで集まってきてくれて、生まれや育ち方に関わらず、子どもが持つエネルギーは万国共通であったことも印象的であった。コロナ禍により4年もの間、FESTとヴィラとの交流は途切れてしまっていたが我々を快く受け入れて下さったヴィラの住民にはいくら感謝してもしきれない。とても感動した訪問であった。

最後に、13期ヴィラ班だけではなく今までのFESTヴィラ班の活動全体を総括して、私たちが今後のFESTとしての活動に活かせる点を述べることで締めくくりたい。まず、渡航中断の4年間の関係を踏まえた関係構築を通して、再度関係を繋げることができた。また、新型コロナウイルスという異例の影響を踏まえ、従来のFESTのフローに囚われず、撤退基準を設けなかったり、団体承認の段階を含めなかったりと、現地の人を最優先に考え、地域の特性や状況を鑑みて柔軟な対応をすることができた。今までのFESTヴィラ班の活動は、今後の支援地での活動や新たに関係構築をする上で欠かせない経験となったと考える。

今までヴィラ班として活動された先輩方、13期ヴィラ班で撤退の準備をする際にご協力いただいた先輩方、何より約4年もの間訪問できていなかったにも関わらずプロジェクトに参加し関係を続け、夏渡航の訪問で暖かく私たちを迎えてくださったヴィラの住民の方々、バランガイスタッフの皆様に感謝している。ヴィラ班としての活動はこれにて幕を閉じるが、今後もヴィラ班での活動を糧に新支援地班に活かしていきたい。

ヴィラ班 プロジェクトリーダー 村山陽朗

2023年夏渡航ヴィラ班 アルバム

BARANGAY LABANGON
CEBU CITY

NO LEAK
NO RUST

7. その他の活動

①INAYAWAN DUMP SITE 訪問

②大新宿区祭り ふれあいフェスタ

その他の活動①

Inayawan Dump Site 訪問

渡航中、滞在先で知り合ったNPOの方の紹介でInayawan Dump Siteへ訪問した。

地域概要

セブ市の中心部から10キロ程の場所にあるINAYAWAN LANDFILL(埋立地)は、1988年からゴミが集積され、2015年に完全に閉鎖された。写真①は、5年前に9期FESTが訪問した際の様子である。2023年現在では、写真②のように大部分が緑と化し、一部のゴミが見られる状態であった。周辺では、写真③のようにゴミを集め、燃やしている子どもたちも見受けられた。ここで生活している人もいる。かつて大量にあったゴミは一体どこに行ってしまったのだろうか。

写真①

写真②

写真③

その他の活動②

大新宿区祭り ふれあいフェスタ

概要

活動で使用している新宿区立新宿NPO協働推進センターから提案を受け、10月15日に戸山公園で行われた大新宿区祭りに参加した。ワークショップを行うことはできなかったが、行える範囲で団体の宣伝の機会を狙い、新宿NPO協働推進センターのお手伝いとして活動した。また、FESTの看板を作成し宣伝する許可を得たので、団体説明、活動紹介、夏渡航での活動写真をテーマに3つの看板を作成した。当日は、飲食物の販売を行い、事前準備と終了後の片付けを手伝った。多くの人にFESTや活動内容を知ってもらう良い機会となった。

まとめ

達成できたこと
・FESTの活動を多くの人に知ってもらうことができた。 ・他の団体との交流の輪を広げることができた。

達成できなかったこと
・SNSのフォロワーなど、数字として見える結果を得ることができなかった。 ・FESTの看板に興味を持って読んでくれた人や立ち止まってくれた人の数を計測することができなかった。

改善点
・チラシを用いた宣伝を行う。 ・FESTの活動に興味を持ってくれた人の数を計測する。 ・FESTに関する声かけや宣伝を積極的に行う。 ・売る役と広報役の割り振りを事前に決定しておく。 ・外部イベントの参加と関連するSNS投稿や事前の広報を増やすことで、多くの人の目につくようにする。

FEST TOKYO
Photo Gallery

FEST TOKYO
Photo Gallery

渡航者コラム

池亀　廉

齊藤　萌々子

鎌田　一利

浅村　彩恵

村山　陽朗

市川　姫菜子

落合　知沙

小野寺　陸

木村　瑠那

杉山　太朗

池亀 廉
武蔵大学 社会学部
2年
代表

昨年の今頃を回顧すれば、
FESTを継ぐと決めたとき、13期構想には私たった1人しかいませんでした。
これが今ではこんなに多くの仲間ができ、こんなにも長い報告書を作れたようです。
ここで多くは語りませんが、私自身この一年の出来事は一生忘れないでしょう。
この一年、本当に一日中FESTのことを考えていました。

そんな始まりの背景もあり、私はもともと代表になれるような人材ではありません。
はじめ、「渡航する覚悟がみられない」とOBに指摘されたこともありました。
しかし、同時にこの団体を再出発させる自信はずっともっていました。
特に13期初期のメンバーには入会時にその熱意を伝えてきたつもりです。

何も経験がない状態からの渡航再開から新支援地決定。
大きなインパクトのある成果は残せずとも、団体として大きく前進できたのではと思います。失敗したことも落ち込むこともたくさんありましたが、
とても楽しく人生で一番充実した1年になったことは間違いありません。

「もう5年くらい一緒にいる感覚だよね（笑）」
この間、この1年を振り返って、萌々子＆一利(昨秋から一緒)とこんな話をしました。
非常に濃い1年を共有したことの証でしょう。
いまたくさんのメンバーに囲まれながら忘れがちですが、
２人は、FEST13期を、リスタートを切ったFESTを共に作り上げてきた
代えがたい特別な仲間だと思っています。
あの時、13期(団体というより個人だった)に勇気をもって入ってきてくれてありがとう。
3人で成田に集合した時のことを今でもはっきり覚えています。

初めて私が見た現地は、想像以上に明るく楽しそうな場所でした。
私が彼らから学んだことはたくさんあります。
やはり、私たちが彼らの生活を変えてやろうというのは間違いだと思いました。
現地のことを常に忘れないでください。

話は戻り、
特に私はFESTへの思い入れが非常に強いと思います。
これまでFESTに興味をもって私の話を聞いてくれた人たちのことは全員覚えています。
中でもうちに入ってきてくれた、一緒に頑張ってきたメンバーには感謝しきれません。
本当にありがとう。
みんながこの1年、もしくは半年で何かを得られたのなら、これ以上のことはありません。ここでみんなとの温度差を確認したいのですが、
実は勝手に家族のように思っていたりします…（笑）

最後にこれから先のFESTメンバーへ、団体再出発第一章を終えた私からひとこと。

私たちに期待してくれているすべての人々のために、
自信をもって責任感をもって活動してほしいと思います。
そして自分たちもその経験を楽しんでいこうではないか！
明るく前向きに活動し、当たり前のことを当たり前にできる。
大きく社会へインパクトを与えられる雰囲気を築いていってほしいと思います。
私も14期へ残るのだけど（笑）

春渡航時、右から渉吾さん、私、萌々子、一利

ある日の男チーム。右から陸、一利、私、竣さん、太朗、陽朗

齊藤萌々子
東洋大学 国際学部
グローバル・イノベーション学科
3年
副代表 海外事業部 ヴィラ班

昨年10月。私はとにかく現地に行きたくて、渡航ができる団体を探していた。学生団体であるため、全て自分たちで考え、現地の住民の方々とコミュニケーションをとり、何かを与えるのではなく一緒にプロジェクトを考えていくことができるというところで、自分がやりたいことができるかもしれないと思った。この約１年間を振り返りながら、活動の中で印象に残っている言葉と抱いた感情、今後への想いを綴ろうと思う。

2023年春渡航準備。新支援地選定の過程で、条件を設定する。現地での調査でどのようなことを質問するのかについて話し合う中で学んだことは、「現地の人のことを第一に考える」ということである。「この地域は条件をクリアしていない、この地域は条件をクリアしているからここにする」という選定の仕方を無意識にしてしまっていた。そもそも支援する地域はどう選ぶべきなのか、「条件をクリアしているから」と言って選んだ地域にFESTへのニーズはあるのか。自分たちの視点に気づくきっかけとなった。

2023年春渡航。現地で感じたことは、現地の住民の方々のエネルギーと笑顔。真剣な話をしていても、現地の問題について話を聞いていても、明るく地域全体で笑顔で話をしている姿がとても印象的である。地域全体で問題を把握し、取り組んでいる地域もあった。住民の方々と話をしていく中で、学生だからこそ住民の方々の近くで一緒に考え、状況を共有しながら進めていくことができるという「学生団体の可能性」のようなものを感じた。

一方で、学生団体である以上、治安の面などを考えた選定条件があることにより、選べない地域があることに「学生団体ならではの難しさ」を感じた。今でもずっと心に残っている言葉がある。私たちが訪問したうちの一つの地域で言われた言葉は「支援を求めている人はたくさんいて、もっと生活水準の低いところはたくさんある。だけどそうなると治安がよくなくなる。」

ある地域のバランガイのオフィサーから、私たちが地域を見て帰ってきて聞いた言葉は、「現実みてきたでしょ。これが現実だよ。」私たちは、「ここは選択できない、他の地域に行くよ」と伝えなければならなかった時、私は言葉が出ず、固まってしまった。活動外でも様々な場面を目にし、動けない自分に対して「自分は何のためにここに来て、何をしているんだろう」と思うことが何度もあった。

13期ヴィラ班。「撤退」とは何か。地域にまだ問題があったとしても、地域の自立として撤退をしてくるべきなのか。ヴィラ班での話し合いを通して、改めてFESTの存在意義を考えることができた。2023年夏渡航にて、渡航メンバーがヴィラ班を訪問し、撤退を伝えた。今までヴィラ班に関わってこられた先輩方の想いと感謝を住民の方々に伝えることができたと報告を受けた。少しでもヴィラ班メンバーとして関わることができたこと、何度も相談に乗ってくださった先輩方、毎回真剣に話し合いに参加してくれたメンバー、代表でヴィラを訪問し、伝えてきてくれたメンバー、FESTのことを覚えていて受け入れてくださったヴィラの住民の方々に感謝したい。

私はFESTとして活動した約１年間、様々な経験をされている先輩方、強い想いを持ったメンバーひとりひとり、そしてパワフルな現地の方々と出会い、国内での活動と現地での活動を通して新しい発見が多くあった。今まで記したように複雑な感情になることも多かった。違う分野を学んで違う経験をしてきたメンバーたちだからこそ、様々な観点から話し合いができたことがとても嬉しく、貴重な経験であった。この１年間関わってくださった全ての皆様に感謝している。

引退後、将来のことはまだはっきりとは決められていない。ただ、一つ決めていることは、FESTでの活動を通して学んだ、疑問に対して探求し続けるということである。新しい発見を求めて、これからどんどん世界を見ていきたいと思う。まずは今一番行きたいと思っているフィールドに行く。自分の興味分野で、自分がやるべきことは何なのかを考え続け、アクションを起こす。

最後に、13期渡航報告書を読んでくださった皆様、13期をサポートしてくださった皆様へ
引き続き、熱い想いを持ったFESTの活動とこれから深く関わっていく現地の方々のことを見守っていただけますと嬉しいです。今後ともよろしくお願い致します。

鎌田一利
明治学院大学
国際学部 国際学科
２年
事業局長 兼 新支援地班PL

「とにかく何か一歩を踏み出そう」、これが私がFESTに入った理由です。私の動機は、他のメンバーのように「将来国際協力の道に進みたいからステップアップのために」・「世界という場で誰かの手助けをしたい」といった崇高なものではありませんでした。どちらかといえばとにかく自分の将来のために何か武器になる経験・スキルを得たい、なんとなく国際協力をやってみようという自分本位のものでした。このようなある意味不純な動機で始まった私のFEST生活でしたが、FESTでの経験は私自身を大きく変えていくこととなります。

私は約一年間の活動を通して日々の通常活動から始まり、さまざまな活動を経験しました。その中で私の印象に残り、私に大きな影響を与えたのはやはり2023年春渡航と夏渡航の二回の渡航です。この二回の渡航はFESTとしてコロナ禍を経てからの再スタートという大きな意味合いを含んでいました。この意味合いで私たちは、春渡航の準備の段階から大きく躓くこととなります。渡航経験者が現役メンバー内におらず、さらに当時の現役メンバーも三人というかなり危機的な状況だったのです。どうにか準備をして春渡航に行こうとする中で多くの人の力をお借りしました。（「感謝」については後ほど記述します。）その結果、春渡航はFESTとしても自分個人としても有意義な時間になりました。FESTとしては、新たな支援地を決定するうえでいくつかのバランガイを回り、めぼしい支援候補地となったBlockIIIを渡航後に新支援地として団体内で承認することができました。一方で、個人としては、実に衝撃的な体験でした。それまでに海外に行ったことはあったものの、すべて旅行といった形であり、春渡航で目にしたものは衝撃的であると同時に新しい世界に踏み込んだ新鮮な感覚がありました。日本で普通に暮らしていては、授業で学んでいるだけでは得られなかったであろう経験がそこにはありました。実際の現地の方の生活を自分の目で見ることによって私の価値観・考え方は大きく変わりました。

（最後にまとめて記載したいと思います。）セブはリゾートというイメージが日本人には強いかもしれませんが、実際は違ったりします。百聞は一見にしかず、私がここでどうこう言うよりもぜひ皆さんにも自分自身の目で耳で体感してもらいたいです。

私たちは春渡航を成功として終えた後、新たなメンバーを募集しました。SNSなど広報に関することはあまり触れられず、団体説明も含め池亀・齋藤を中心に任せっきりになってしまいましたが、（本当にありがとう。）結果としてFESTとして個人それぞれになんらかの魅力が伝わり、気付けばメンバーは12人にまで増えていました。人員は多ければ多いほどいいというわけではありませんが、FESTとして今後PJを進めていくにあたって支障がでないほどの人数になったことは一安心でした。人数を取り戻すという意味も「コロナ後の再スタート」に含まれていたと思うので目標を一つ達成できたことにもなりました。

そうして始まった夏渡航。この夏渡航は私個人として春渡航とはまた違った意味合いを持ちました。夏渡航をマネージメントする立場となり、それまでより一層主体的にならなければならなかったのです。初渡航メンバーへの研修・PJの進行を含め、体力勝負な面もありましたが、メンバーの協力・支えもあって何とかやりきることができました。一方で渡航中に自分たちの準備不足も痛感することとなり、今後において反省点も多く残りました。一番重要なPJの進行に関しては「バランガイ・住民への挨拶」から始まり「ニーズ調査」の段階まで当初の目標通り完遂することができました。住民との関係構築も含めて支援の最初の段階としては素晴らしい掴みだったと総括しますが、これからが阻害要因の洗い出しから始まりPJの核を成す部分に入っていくのでより個人個人が責任を持って取り組んでいってもらいたいと思います。夏渡航全体を通して、ここでは書き切れないほどの多くの学びを得て、FESTとしても自分個人としても大きく成長できた期間だと改めて思います。

少し話は変わりますが、運営としての自分の活動もここで少し振り返っておきます。正直自分が運営メンバーとしてここまでやってきたことはたいしたことはないかもしれません。他の運営メンバーにたくさん頼ってしまいました。ただ私はこの経験を通して「立場が人を変える」ということを学びました。

この言葉は高校の頃に恩師が言っていた言葉ですが、自分は向いていないと思っていてもいざやってみれば意外と向いていたり、自分が予想外の方向に変わっていくものです。もし向いていなかったりしんどいなと思ったら後でいくらでもやめられます。あれこれ考える前にとりあえず一歩を踏み出すべきだと私は思います。

それでは最後にFESTを通しての自分の変化をほんの少しだけまとめて記しておきます。世界の本来なら関わることもないであろう人たちのことを考え、彼らのために力を注ぐという国際協力という活動は素晴らしいとFESTを通して改めて思いました。一方で、逆説的に日本という国の素晴らしさも実感しました。この素晴らしい日本を作ってきたのは他でもない自分たちの親世代を始めとするさらに上の世代です。極端な話をすれば、戦時中私たち「未来」のために亡くなっていった人たち・高度経済成長期中、日本のために身を粉にして働いた人たちもそれに当たるでしょう。私も彼らへの恩返しとして彼らと同じように未来に繋いでいく何かをしたいと思うようになりました。それが現時点での私の「意義」です。その具体的な手段が一周して国際協力という活動かもしれないし、違うかもしれません。私はこの意義を大切にしながら、実現のための手段を模索するために今後もいろいろなことに挑戦していく所存です。

「引退する」にあたってのメッセージを以下に記します。まずは、倉田拓人さん・森田渉吾さんを始め、お世話になった方々本当にありがとうございました。特にFESTのOBである森田渉吾さんと自分以外の13期初期メンバーである代表の池亀と副代表である齊藤に感謝したいです。当時あまりにも未熟だった自分が海外事業局長・新支援地班PLとして何とかここまでやって来れたのは間違いなく彼らのおかげです。渉吾さんは、渡航時現地でのノウハウが何もなかった私たちに渡航のイロハを全て教えて下さり、その後も何かと私たちを気にかけ、助けてくださりました。二人は言うまでもありません。FESTに後から入った自分を気にかけ、FESTに関するいろいろなことを教えてくれました。二人を始め、皆とここまで継続することができて良かったです。自分もここまでの道のりの一端を少しでも担えていたとしたら嬉しく思います。今後もFESTを自分のできる限りの形で支え、応援し続けていきます。これからも活動に携わるメンバーは、自分の学びを大切にしながらFESTを引き継いでいってください。まだまだ未熟である自分ですが、今までの経験を大切にして新たな挑戦に飛び込んでいきたいと思います。今後ともFESTをどうぞよろしくお願い致します。

浅村彩恵
東京外国語大学
言語文化学部 英語専攻
3年
事務局長 兼 海外事業部 新支援地班

「自分よがりになるな。誰かのために生きなさい。」高校三年生の時に、一番お世話になった部活の顧問の先生が常々口にしていた言葉でした。分かった気でいたものの、本当の意味で「誰かのために生きる」とは何か、自分には全く想像がつきませんでした。大学に入学し一年が経った頃、新しいことに挑戦しつつ、その問いについて自分なりの答えを出したいと思い、社会貢献という観点からイメージが湧きやすい国際協力に関心を持つようになりました。そこからFESTの存在を知り、「世界から向こうみずな支援をなくす」という団体の理念に強い共感を覚えたことを今でも覚えています。

問いに対する自分なりの答えを導き出すことができたことに加え、FESTでの活動、そして何より陽気で暖かい住民の方々との関わりを通じて、自分の世界は大きく広がりました。その世界を広げた大きな気づきは、主に二つあります。第一に、住民の方々の生き様です。私が受けた印象として、彼らはコミュニティー内の繋がりを大切にし、互いに助け合いながら、今を一生懸命に生きていると感じました。この出会いにより、今、自分の目の前にいる人やその瞬間、1日1日をもっと大切に生きていこうと強く思いました。社会人になっても、忙しない日本の社会にいつの間にか呑み込まれることがないよう、住民との関わりの中で得ることができた気づきに、何度も何度も立ち返ることになると思います。

第二に、実際にその物や事に足を踏み入れ、自分の目や耳、鼻、体全てで体感することの大切さです。まさに「百聞は一見に如かず」ということを身を持って体感しました。初めて支援地に入った時に感じた空気や匂いなどを誰かに言葉で伝えても、実際に現地に行ってみなければ伝わり切らないことばかりであると痛感しました。何かについて責任を持って詳しく語る際には、知識を多く詰め込んだだけで満足せず、なるべくその環境へ飛び込み、実際に体感して学び続ける姿勢を忘れないようにしたいと心に決めました。

最後に、「誰かのために生きる」とは何か。FESTの日本国内での活動、そして2023年夏渡航を経て考えた答えは、「誰かのために」とは決して、支援する側とされる側の線引きもなければ、自己犠牲的なことでもない。関わる相手のために、そして自分自身もその関わりを通して真剣に問題の核心と向き合い、対等に互いに良い方向に進んでいくことだと思いました。色々な気づきを与えてくれたFESTの仲間や、渡航先で出会った住民の方々との繋がりは、自身にとって一生の宝物です。私は10月をもって引退となりますが、今後もFESTはさらに進化し、次の挑戦に向かって突き進みます。是非とも、応援よろしくお願いします。

村山陽朗
駒澤大学
文学部 社会学科
1年
海外事業部ヴィラ班PL

中学3年生、15歳だった自分が初めて訪れた海外がフィリピンのセブ島でした。その時、タランバンという地域で活動していたNPOボランティア団体を見学した際に、当時の自分より年下の子供が学校にも通えず、劣悪な環境の中で生活していた状況に15歳ながら、強い衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えています。この経験が、私が国際協力に興味を持ち、行動に移すうえでの起爆剤となりました。それから3年間コロナによりもどかしい日々が続きましたが、大学1年生の春、やっと行動に移すことができ、先輩の紹介であの時と同じセブ島を支援地にしているFESTに入会しました。正直言って成り行き任せに入会しましたがFESTはとにかく凄かったという印象があります。創設以来変わらず、芯のあるヴィジョンのもと支援先を第一に考え、メンバーひとり一人が強い意志をもって熱い話し合いをしていました。そんなFESTで自分がやっていけるのか、自分がFESTに何を還元できるのだろうか。不安は数多くありましたが、活動していく中で次第に渡航メンバーとしての当事者意識が芽生え、PLとしての責任感が生まれ、いつしかその不安は消えていきました。

そんな中迎えた今回の渡航を振り返ってみると、自分にとって大きく2つの成果を得ることができたと思います。

1つ目は現地での感覚を掴むことが出来たことです。渡航準備として日本国内で現地の写真を見たり、渡航経験者の話を聞いたり、出来る限りの想像はしていましたが実際の現地での排水溝を流れる汚水や動物のフンの匂い、住居が密集してジメジメとした何とも言えない雰囲気など、現地に訪れなければ分からない感覚を五感で感じることができました。これによって現地での支援のイメージがより鮮明なものとなり、今後のPJに対する思いを強固にすることができたと思います。

2つ目はヴィラ班PLとしての責務を全うできたことです。7月、今までPLを務めていたももこさんが留学するとのことで、その時、自分はFESTに入ってまだ数か月で右も左も分かりませんでしたが、とりあえずやってみる精神で受け入れました。活動では毎回1時間遅れてきたり、進行がスムーズにいかなかったり、時にタスクを丸投げしたりとメンバーには多くの迷惑をかけたと思います。その中で何とか渡航ではヴィラ班としての目標であった住民に感謝を伝えて、撤退することができました。本当にみんなのおかげだとつくづく実感しています。ありがとうございました。今回の渡航報告会を持ってヴィラ班は解散して、PLとしての役職も離れますがこのPLとしての経験は少なからず自分の成長に繋がり、今後の新支援地班としての活動で糧になることでしょう。

最後に、今後の展望として意気込みを記して締めたいと思います。今回の渡航を通して自分の浮き彫りになった点が英語力の低さです。住民やバランガイでのコミュニケーションがままならない他、自分ひとりでは生活することも出来なかったでしょう。この情けない自分を踏まえて、今後は新支援地班としての活動と平行して英語の勉強にも力を注いでいきます。次回渡航では向上した英語力のもと積極的に住民とコミュニケーションを図り、良好な関係を築いてPJをしていければと思います。これからもFESTとしても個人としても進化していきます。

今後とも我々FEST TOKYOをどうぞよろしくお願いいたします。

市川姫菜子
共立女子大学
国際学部 国際学科
１年
新支援地班

私がFESTに入ったきっかけは、“国際学部だから何か国外で人と関わることをしたい”というとてもアバウトな理由からでした。正直FESTに入ってから自分が何の準備をしているのか、これからどんな地域に行くことになるのか、そもそもこの8月に自分も渡航するのかも決めてもいない状況で作業をしていた時期がありました。

新たに支援する地域を決定し、準備を進めていく中でFESTの理念にある「向こう見ずな支援をなくす」ことの難しさを実感しました。私たちが現地の住民の方と一緒にやりたいこと、できること、住民の方が私たちに求めていること、すべての条件を満たす解答を出すことはできません。限られた時間、お金、人材の中で最大限の力を発揮する必要がありました。

これは準備段階だけではありません。現地では想定できていなかった壁にぶち当たり、短時間で解決しなければならないことがいくつもありました。そんな状況に陥った時に、お互いの意見を受け入れることは当然大切ですが勇気をだして反対意見を出すこともとても大切だということを今回の渡航で学びました。

これは全員が学生であるFESTだから、今回一緒に渡航したこのメンバーだから反対意見も受け入れ話し合いその場でベストな答えを出すことが出来たのだと思います。この経験はこれから先、たとえ日本国内であってもどんな場面でも役に立つと感じました。

写真や動画で見ただけでは分からない湿度や匂いを肌で感じ、現地の方たちの明るさに救われたりと今まで生きてきた中では出来なかった経験が沢山出来ました。

今回の渡航は、これから数年かけて支援していくBlockIIIとFESTの大事な第一歩であり、私が人として少しではありますが成長することが出来た2週間でした。

落合知沙
上智大学
総合人間科学部 看護学科
2年
海外事業部　新支援地班，WCM

今回の渡航で初めてお会いしたBlockIIIの住民の方々はとても明るく、いつも私たちのことを温かく迎え入れてくださいました。私は住民の方々の笑顔がとても好きで、現地に入って活動をしていると、私も自然と笑顔になれるような素敵な地域でした。だからこそ、私たちがこの地域に関わっていくことには責任をもたなければならないと感じました。その責任とは、「現地の方の今ある生活や幸せを守ること」と、「私たちに話してくださったニーズに真摯に向き合うこと」です。

まず、何を幸せだと感じるのかは人それぞれで、私たちはその価値観を尊重しなければなりません。その際に必要となることはバイアスをなくすことだと思います。自分たちのもっている価値観と違うことを目の当たりにするとそれを不幸せだと決めつけたり、自分の価値観を押し付けたりしてしまうこともあるかもしれません。それをなくすために、私たちは住民との対話を通してその人の考え方や生き方に近づく努力をする必要があり、そのような点において、現地に足を運ぶということに大きな意味があるのだと思います。現地の方の声によく耳を傾けてそれに精一杯向き合うことが何よりも大切だと気が付きました。

また、住民の方が私たちに話してくれたニーズというものは、彼らが本当に困っていることで、その重大性や深刻さは私たちが理解したくても理解しきれない部分があると思います。ニーズに向き合うということは、住民の方から寄せられた困りごとから目を背けないということで、解決をするために自分たちができることを探し続けたいと強く感じました。

今の私たちにできることには限りがあり、私はその無力さも実感しました。それでも私たちにもできることはあるはずで、それを探し続けることが大切なのだと考えています。住民の方々の価値観を尊重し、あらゆる問題も仕方がないと片付けるのではなく「考える」ということを諦めない人になりたいです。

最後に、FESTで活動をする中でメンバー同士で意見がぶつかることが多々ありますが、それは皆の、この活動に対する思いが強いからだと感じています。国際協力に関する話も、それ以外の話も、真剣に話して、真剣に取り組めるこの環境に感謝しています。今後もFESTで皆とPJを展開していくことがとても楽しみです。FEST内にとどまらず、いつもたくさんの刺激と知識と優しさをくれる家族や友達、先生方にはとてもとても感謝をしています。受け取った恩を誰かに送れるよう、今後も精一杯、自分なりに努力を重ねていこうと思います。

小野寺陸
武蔵大学 社会学部
メディア社会学科GDS
1年
新支援地選定班、WCM

いままで生きてきて自分は社会的にみて裕福な人間だなと感じていました。しかし、その境遇にかなり甘えているなとも感じていました。そこで大学では、これまでの自分を顧みて、自分から積極的に物事を考えられるような体験をしたいと考えていました。だからこそ今回の渡航で大きな収穫を得られたと感じています。

現地に入ってまず自分の想像以上に発展が進んでいない場所という印象を受けました。行く前にどのような場所であるか写真などでイメージを作っていたのですがあまり現実的に考えることができませんでした。実際には、日本に住んでいる人では絶対に体感できないような場所であり、自分が今まで見てきた世界が崩れてしまうくらいの衝撃を受けました。それゆえ自分が今までどれだけ豊かな境遇にいたのかを体感することとなりました。

また、貧富の差が大きいという印象も抱きました。今回の支援地であるBlockIIIなどのスラム地域とよばれる所は治安も悪く衛生面も発達していませんが、リゾート地やショッピングモールなどは日本と同じくらい衛生状態であったり発展した場所であると感じました。自分の中のフィリピンはややスラムよりの国だと考えていたのでこの差にとても驚きました。

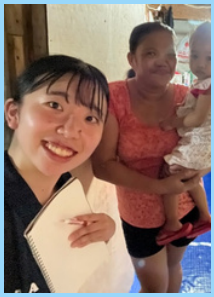
しかし、子どもたちだけでなく現地の住民全員が日本と同じでとても元気で笑顔豊かでした。経済的に不利であるからこそ周囲の人との関係やつながりをとても大事にしているし、彼らは彼らなりにとても楽しく過ごしているのだと考えました。

これからは自分は同年代のいろいろな国の人に比べて、勉強も満足にできるし、ご飯も食べたいときに食べたい分だけ食べることができる、好きな服をたくさん着ることができる、好きなことを楽しむ時間と環境がある。そのことを頭に入れながら自分のやりたいことを突き詰めて、自分のなりたい人物像に近づけたら良いなと思います。

来期に向けて2つ積極的に取り組んでいこうと思っていることがあります。1つ目は来期では、PJを開始していくため、より現地のことを考えるように努力することです。次の渡航から現地に対して本格的なプロジェクトを開始するので、今まで以上に「自分たちが考えていることが現地の方からよくない印象を持たれることがないか」であったり、「現地のニーズに答えているのか」ということを深く考えていこうと思います。

また、1年だからという言い訳をなくし、自分で積極的にFestに何が必要か、所属する班に何ができるかを考え、できるだけ多くの仕事をこなせるようにしたいです。そして、その結果をできるだけ多くの人に啓発し、少しでも多くの人に支援を必要とする人がいるということを伝えたいです。今後ともFest Tokyoへの応援をよろしくお願いします。

木村瑠那
慶應義塾大学
法学部 法律学科
1年
海外事業部ヴィラ班



「国際協力の分野に挑戦したい」その思いは、高校の頃から強くありました。高校時代では、JICA職員の方やNPO職員の方にインタビューをする中で、途上国支援について自分なりに学びを深め、考えてきたつもりです。しかし、どんなに話を聞いたり論文を読んだりしても、まず現地を経験しないことにはどこまで行っても自分の想像の域を出ないのではないか。そんな思いを抱き、大学では実際に自らの足で赴いて現地をこの目で見て肌で感じたいと考えていました。だからこそ、FESTでこの夏に渡航を経験できたことは私にとって非常に大きな一歩であり、同時にここからが新たなスタートであるとも感じています。

4月にFESTに入ってから、私はヴィラ班としてこれまで活動を行ってきた支援地ヴィラを撤退する準備を進めてきました。自身が1度も行ったことのない地で、しかもコロナで4年現地に赴いてない、そんな支援地に撤退をどう伝えるのか、非常に難しいことだったと思います。「撤退」といえば簡単ですが、ではそれを実際に英語で伝えるときはどう表現するか、まずはそこからでした。現地に向かうまでも不安はありましたし、自身が初めて入る支援地でもあったので緊張もしていました。しかし、バランガイの方々もヴィラの住民の方々も私たちを温かく歓迎してくださり、不安や緊張は気づいたら消えていたことを今でもよく覚えています。

そして、「人の温かさ」というのは、これからFESTが本格的に活動していくBlockIIIでも強く感じたことです。私は、他のメンバーよりも渡航期間が短かったため支援地に入った回数は多くありませんが、その少ない中でも暖かさというのはとても感じ、濃い時間を過ごせたと思います。私達のインタビューにも積極的に応じてくれて、これから共にPJを進めていくことが楽しみだと感じました。もちろんその一方で、このような明るい面だけではなく、生活で苦労している現実にも直面しました。

「お米を買うお金がない」「病気になってもお金がなくて子どもを病院へ連れて行けない」そんな生の声を聞き、学生である私達にできることは何か、支援とは何かをとても考えさせられました。これからの活動の中で、その自分なりの答えを模索していけたらと思います。

　最後に来季に向けて、私は「伝えること」を心がけたいと思います。現地に入って、英語を介してコミュニケーションをとるわけですが、英語はこちらもあちらも公用語ではない言語です。それゆえ、私たちが伝えたいことが100全て伝わっているのか、自分としては時々不安になることもありました。だからこそ、言葉だけでなく態度や行動で伝えることを欠かさないようにしたいと思います。PJはまさに私達が住民に示す行動の1つといえるでしょう。

　今後ともどうぞ応援よろしくお願いいたします。

杉山太朗
上智大学
外国語学部 ロシア語学科
２年
海外事業部 ヴィラ班

・半年間で学んだこと

FESTで学んだことは主に二つで、国際協力の視点とチームにおけるコミニュケーションである。入会当初は「国際協力」の言葉の意味が曖昧であったが、今ではそのイメージの解像度がサークル活動を通じて上がった。またサークル活動における国際協力は一人で行うわけではないため、チームの在り方やチーム内での個人の在り方を学ぶことができた。

・国際協力の視点

助けると言えど学生にできることには限りがあり、さらに一方的に物資を支援するにしても根本的な問題は解決されない。FESTで学んだ視点は現地の問題の具体的な一部にフォーカスするのではなく、その諸問題の根本原因をなくしていくといった視点だ。

・チームの在り方

まとまった人数で、一つのものを作り上げるためには様々な要素が必要になると思う。その中でも私が活動を通して学んだことは"共通の認識"、"協力"だ。同じ目的を持って作業していたとしても個人個人の中にあるイメージが一言一句同じであることはまずないと思う。共通認識をできる限り共有することによってみんながイメージしている物がより正確に完成するのだと感じる。また個人によって度量が異なり、時と場合によっても度量が異なってくる。そこでどこまで助け合い、分担できるかがプロジェクト進行のスムーズさや個人が無理なく続けられる環境につながることを学んだ。

・チーム内のでの個人

共通認識を持ち協力するためには個人の立ち回りが重要だと学んだ。具体的に二点あげると、”コミニュケーションを取る”、そして”自分の容量を把握する”の二点だ。周りの気遣いだけでは認識ができていない部分をカバーすることはできない。自分で不足している認識を確認する姿勢も求められるということだ。また自分の能力を知ることによって相手に任せたり、自分が周りを手助けできることもある。

・来季への意気込み

来季になると経験者としての責任も求められ、さらに知識を学ぶだけではなく伝えていく側としての役割も務めることになるだろう。良く勉強するとともに、伝える側の視点も学んでいこうと思う。

来期展望

FEST創立13年、14期を迎えることとなりました。多くの困難を乗り越えた今までの先輩方、そして13期からのバトンに強い期待と責任感を感じております。

14期の団体目標は「活動を継続できる環境を作り、支援地と共に成長するFEST」です。

前期で渡航準備・渡航を共にした仲間の状況や望み、支援を必要とする人々の助けにできるだけ応えたい、その過程で団体と自身が成長したいという私なりの思いを目標に掲げました。

私自身13期で活動して今のFESTに必要だと感じたことは活動を継続できる環境でした。団体として国際協力に挑戦し続けるためには無理せず継続できる必要がありますが、13期では責任や仕事量が偏っていたため多少の困難を伴ったものでした。活動を無理なく行うためにも個々人が適切な強さの責任感を持ちその中で協力し合い、またその動機付けとして各メンバーが自身の活動に根拠を持てるような環境を作りたく思います。そのような環境、個人の意識の改善・向上がFEST全体の改善・向上につながると考えております。

そして今14期では前期の支援地における下準備を経て、実際に現地でのプロジェクトを実行する段階となります。FESTでは短期完結の支援を提案しており、支援地住民が自立のための努力・成長することも求められます。そのためにも代表として支援開始から自立を視野に入れたプロジェクトを進めてまいります。一方で、各FESTメンバーも成長や経験を求めて入会しているはずです。各メンバーが団体内において活動根拠を見つけられるような、またそれを基に成長できるような環境作りを目指します。

私自身入会若干半年で国際協力の視点、チームにおける役職としての視点など学ぶべきことは手に余るほどございます。代表としてもこの不安は常につきまとうでしょう。しかし団体目標を基に、今期のFSETの柱である「プロジェクトの実行」を中心に、私なりにFESTの魅力であるオープンさと成長させてくれる環境を受け継ぎ、養いそして売り込んでいきたく思います。

最後になりますが、FESTを継いで下さり今もなおFESTに力添えしてくださるOBOGの皆様、そして13期メンバーの皆様本当にありがとうございます。

皆様からの支援のつながりを後代に良い形で残せるよう精一杯務めさせていただきますので、どうかお力添えのほどよろしくお願いいたします。

14期代表：杉山　太朗

最後まで「13期渡航報告書」を読んでいただき、
ありがとうございました。

この1年、「FESTリスタート」を掲げ多くのOBOGや現地セブの方々に支えられながら非常に有意義な活動を行うことができました。皆様のご理解とご協力なしにはこの報告書も
存在しないことでしょう。

振り返れば、13期FESTは私と齊藤2人での始まりでした。当時より皆さまに心配を募らせた期であったことは認めますが、
今では曲がりなりにも当時想像もできない程たくましくなっているのではないかと思います。
改めて、この13期に関わっていただいたすべての方へ
感謝申し上げます。

次期14期は現地PJ開始へ向け、抜かりなく計画を進めて
参ります。
引き続き応援のほど宜しくお願い致します。

13期代表 池亀 廉